



- 第1節 家庭学習習慣
- 第2節 学校外の学習時間
- 第3節 宿題の種類
- 第4節 学習の方法
- 第5節 学習方法のタイプ
- 第6節 家での勉強の様子
- 第7節 テスト勉強の開始時期
- 第8節 日常生活の中の学び
- 第9節 ICTメディアを使った学習

第1節～第5節 ベネッセ教育総合研究所 特任研究員 沓澤糸
第6節～第9節 ベネッセ教育総合研究所 主任研究員 邵勤風

1

家庭学習習慣

家庭学習の日数は、中学生は2006年より、高校生も2015年で大きく増加した。「ほとんど毎日する（週に6～7日）」は中学生では39.5%、高校生で35.4%と、これまでの調査でもっとも高い比率となった一方、「家ではほとんど勉強しない」は中学生で13.0%、高校生で15.6%と、もっとも低い比率だった。中学生について成績の自己評価別にみると「成績上位」「成績中位」が、高校生について学校偏差値帯別にみると「55以上」の学習日数が多いことがわかった。

本章では、家庭での学習について、主に1990年からの経年でその変化をみていきたい。まずは、中・高校生に対して、学習塾や予備校、家庭教師との学習以外に家で週何日くらい勉強するのかをたずねた、家庭学習の日数に関する結果からみてみよう。

●中・高校生とも学習日数の平均が過去最多

中・高校生ともに、2006年よりも家庭学習の日数が増加している（図2-1-1）。とくに「ほとんど毎日する（週に6～7日）」は中学生で39.5%、高校生で35.4%と、これまでの調査の中でもっとも高い比率となっており、また2006年と比較してもそれぞれ約1割増えている。「家ではほとんど勉強しない」も中学生で13.0%、高校生で15.6%と過去最低の比率で、こちらも2006年と比較して約1割減少している。平均日数をみても、2015年は中・高校生ともに4.1日だが、2006年は中学生が3.4日、高校生が3.0日、1990年は中学生が3.3日、高校生が3.6日であり、2015年が過去最多である。

●2001年より学習日数の増加が続く中学生

中学生について学習日数の経年での変化をみると、1996年から減少していたが、2001年で底を打ち、2006年、2015年と増加している。さらにくわしくみると、「ほとんど毎日する（週に6～7日）」が1990年

よりも19.6ポイントも増加している。これに対し、「家ではほとんど勉強しない」は1990年よりも4.1ポイント減少している。また、「週に半分以上はする（4～5日）」は21.9%、「週に半分以下しかしない（2～3日）」は16.3%、「週1日くらいしかしない（1日くらい）」は8.2%で、2006年までと大きな変化はない。

●学習日数が大きく増加した高校生

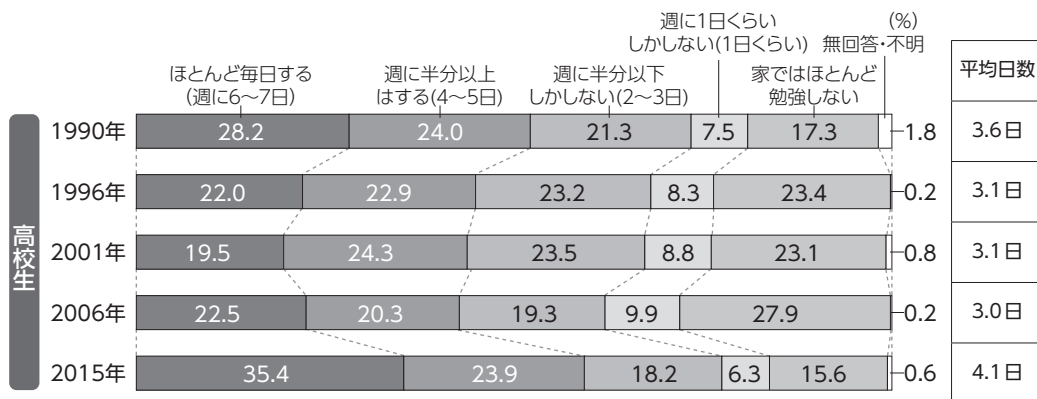
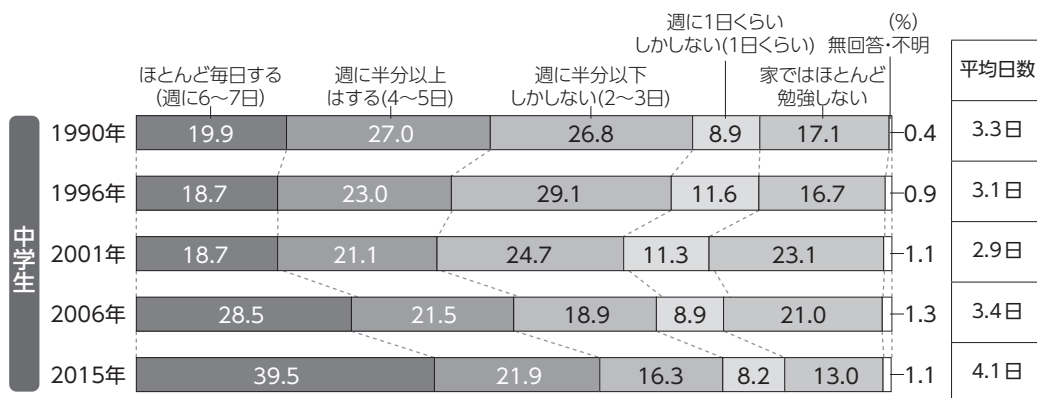
次に高校生について、1990年から2006年までの推移をみると、2006年はそれまで減少傾向だった「ほとんど毎日する（週に6～7日）」が微増したものの、「家ではほとんど勉強しない」も増加するなど、全体に減少し続けていた。しかし、2015年は「ほとんど毎日する（週に6～7日）」が2006年に対して12.9ポイント、1990年に対しても7.2ポイント増加している。また、「家ではほとんど勉強しない」は15.6%で、2006年に対して12.3ポイント減少している。高校生では、2006年まで減少が続いていたが、2015年は大きく増加している。

このように、中・高校生の学習日数は、勉強しない子どもが減少し、毎日勉強する子どもが増えた。その結果、平均での学習日数も増え、これまででもっとも多くなっている。

Q

家での勉強についてうかがいます（学習塾や予備校、家庭教師との学習は除きます）。
あなたはふだん、家でどのくらい勉強をしますか。

図2-1-1 家庭学習の日数（中学生・高校生、経年比較）



注 1) 平均日数は、「週に 6～7 日」を 6.5、「週に 4～5 日」を 4.5、「週に 2～3 日」を 2.5、「週に 1 日」を 1、「ほとんどしない」を 0 として、無回答・不明を除いて算出している。

ここまでみてきたように、全体的に学習日数が増加した背景には、いくつかの要因があると思われる。ここでは、成績などの側面に着目して学習日数の分布をみてみたい。

●中学生では「成績上位」「成績中位」の学習日数が増加

まず、中学生の学習日数を成績との関係に着目して見てみよう（図2-1-2）。調査の中で成績の自己評価をたずねた項目の結果から「成績上位」「成績中位」「成績下位」の3群で学習日数の分布をみると、「ほとんど毎日する（週に6～7日）」では「成績上位」48.9%、「成績中位」43.9%であるのに対して、「成績下位」28.8%と大きな差がある。逆に、「家ではほとんど勉強しない」で

は「成績下位」17.3 %に対し、「成績上位」10.6%、「成績中位」9.2%である。「成績上位」「成績中位」の学習日数が全体の結果を引き上げていることがわかる。

次に、「ほとんど毎日する（週に6～7日）」の回答を取り上げて、成績の自己評価別に経年変化をみる（図2-1-3）。「成績上位」は2001年まで減少していたものの2006年から増加、「成績中位」は2001年から増加している。2006年からは、どの群も増加しているが、とくに「成績中位」では2006年28.2%から2015年43.9%と15.7ポイントの増加、「成績上位」も2006年37.0%から2015年48.9%と11.9ポイント増加し、「成績上位」「成績中位」の増加が目をはく。

図2-1-2 家庭学習の日数（中学生、成績の自己評価別、2015年）

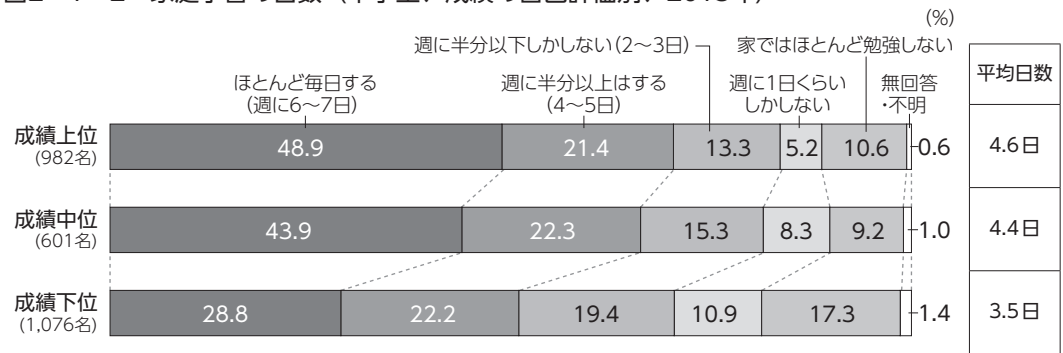
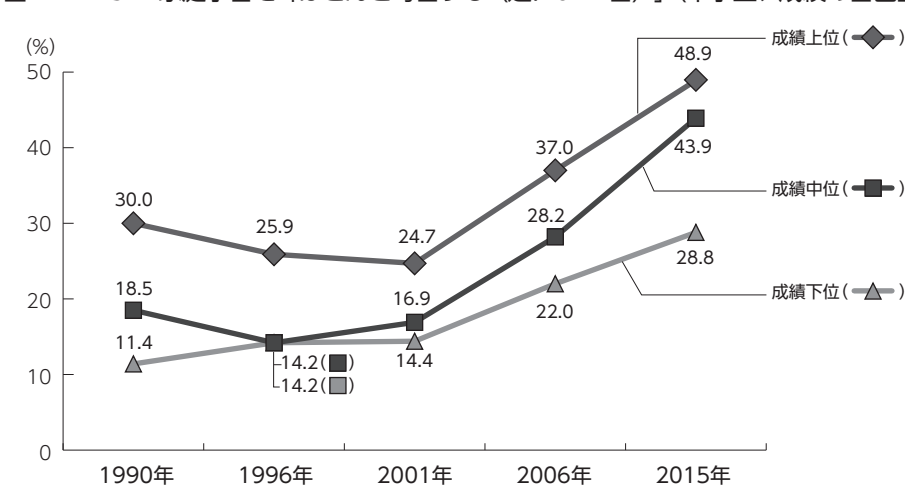


図2-1-3 家庭学習を「ほとんど毎日する（週に6～7日）」（中学生、成績の自己評価別、経年比較）



注) 1990 年は成績上位 940 名、成績中位 557 名、成績下位 1,017 名。1996 年は成績上位 1,029 名、成績中位 578 名、成績下位 1,088 名。2001 年は成績上位 873 名、成績中位 602 名、成績下位 980 名。2006 年は成績上位 828 名、成績中位 475 名、成績下位 1,006 名。2015 年は成績上位 982 名、成績中位 601 名、成績下位 1,076 名。

●偏差値「55以上」が学習日数を牽引する
高校生

高校生については、学校の偏差値帯により偏差値「55以上」「50以上55未満」「45以上50未満」「45未満」という4群でみると（図2-1-4）、「ほとんど毎日する（週に6～7日）」では「55以上」60.7%に対し、「50以上55未満」36.1%、「45以上50未満」19.8%、「45未満」7.6%と、「55以上」とそれ以外の群とで大きな差がある。「家ではほとんど勉強しない」では、「45未満」34.6%に対し、「55以上」6.2%である。2015年の学習日数の増加は、「55以上」が大きく牽引する結果となっている。

次に、経年比較をみている（図2-1-5）。「50以上55未満」は、2006年まで減少していたが、2015年で増加に転じている。それ以外は2001年までは減少していたが、2006年からは増加に転じている。2015年で大きく増加したのは「55以上」「50以上55未満」で、いずれも約2割増加している。とくに、「55以上」は2001年から2006年にかけても大きく増加しており、2001年と2015年を比較すると約3割増加し、全体を引き上げている。

このように、家庭学習の日数は、中・高校生ともに成績等が高い層に引き上げられているようだ。

図2-1-4 家庭学習の日数（高校生、学校偏差値帯別、2015年）

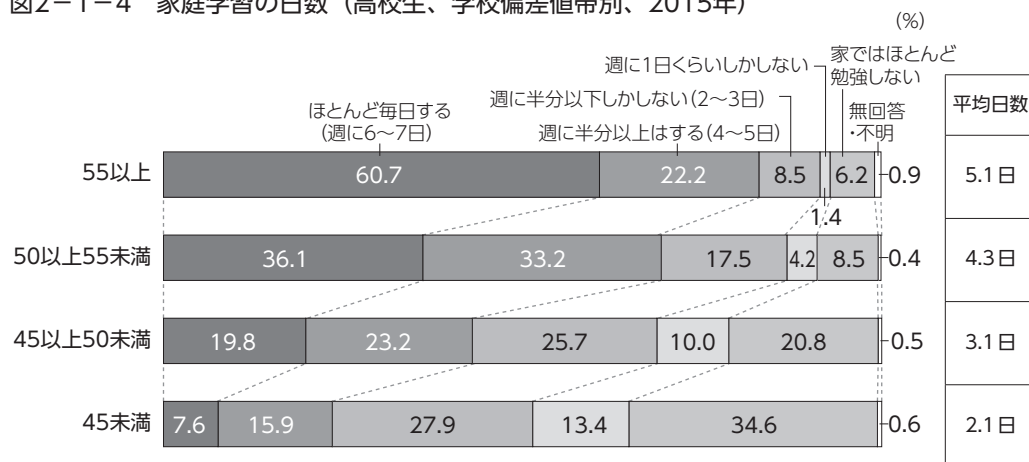
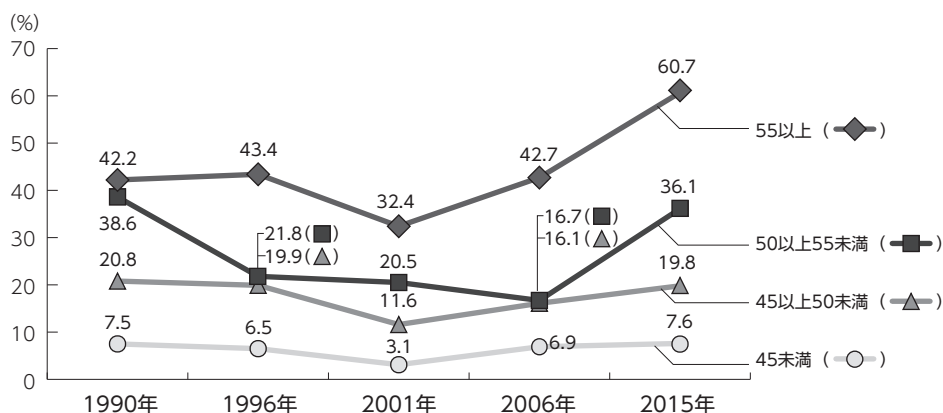


図2-1-5 家庭学習を「ほとんど毎日する（週に6～7日）」（高校生、学校偏差値帯別、経年比較）



2

学校外の学習時間

平日、休日の学習時間ともに、増加している。2006年との比較でみると、とくに小学生、高校生が大きく伸びている。「ほとんどしない」という、学習しない子どもの減少が、小・中・高校生で共通にみられ、とくに高校生では休日に長時間学習する生徒が増えている。また、学校外での学習時間のうち宿題の時間が占める割合が2006年よりも増えている。宿題の時間の増加が学習時間全体を増加させる結果となっており、家庭学習への学校教育の影響が強くなっている。

前節では中・高校生の家庭学習の日数についてみてきたが、本節ではこれに学習塾や予備校、家庭教師などの学習機会も加えて、学校外全体での学習時間についてみていきたい。本節は、中・高校生に加えて小学生についても、1990年からの経年での推移をみることができる。調査では平日の学習時間、休日の学習時間、宿題の時間についてたずねている。

1) 平日の学習時間

●平日の学習時間は全体的に増加、「ほとんどしない」の比率は過去最小

それではまず、平日の学習時間からみてみよう（図2-2-1）。小学生、中学生は2001年から、高校生も2015年は明確な増加がみられる。とくに、いずれにおいても「ほとんどしない」がこれまでで最小の比率となり、平均学習時間も2006年より増加している。

また、平均学習時間の推移と教育政策、教育課程の変化などを重ねてみると（図2-2-2）、小・中学生はもっとも学習時間が減少した2001年の後に「学びのすすめ」¹⁾が公示され、その後の2006年で増加に転じている。また、高校生では2006年まで減少・停滞が続き、2015年に大きく増加しているが、この間に学習指導要領の改訂、実施や、

これに伴う学校の指導の変化があった。「学力向上」を掲げた教育行政や、これに伴う学校教育の変化は、この時期、学校外での学習時間にも影響を与えたと考えられ、学校や子どもを取り巻く環境の変化が、2015年の調査結果に与えた影響が感じられる。

●平均学習時間が過去最長、学習しない子どもの比率も大きく減少した小学生

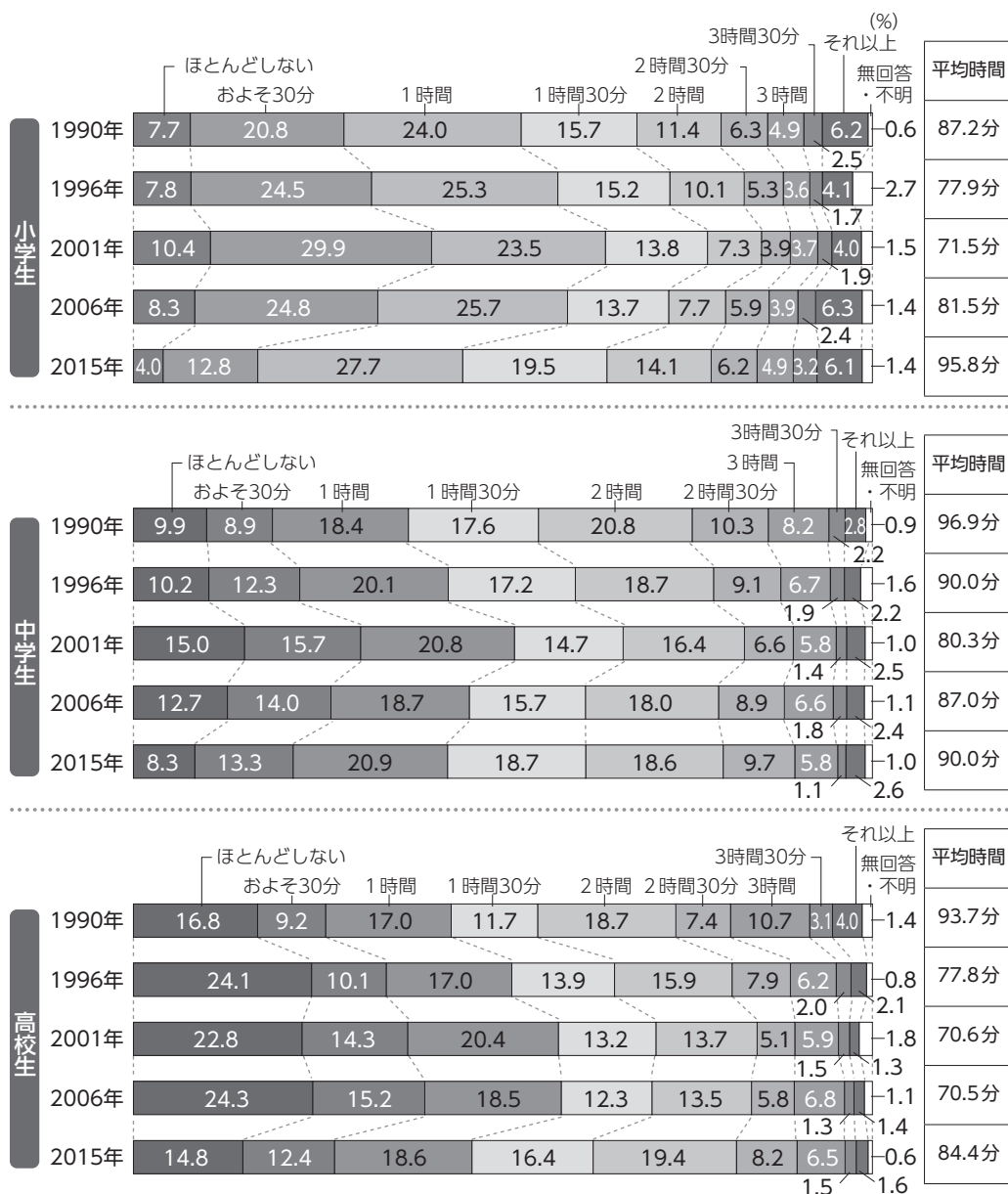
次に、小・中・高校生それぞれをくわしくみていこう。小学生では、1990年からの学習時間の減少傾向が2001年で底を打ち、2006年、2015年と明確な増加傾向がみられる。具体的には、2015年は「ほとんどしない」が4.0%、「およそ30分」が12.8%と、学習時間が30分以下の比率が16.8%だが、2006年は33.1%、もっとも多かった2001年は40.3%であり、学習しない子どもの比率が大きく減少している。2006年に比べてもっとも増加したのは「2時間」の14.1%（2006年は7.7%）、ついで「1時間30分」の19.5%（2006年は13.7%）だが、それ以上の学習時間を回答した比率も増えており、全体に長時間学習する子どもが増えている。平均時間をみても、2006年が81.5分、過去4回でもっとも長い学習時間だった1990年が87.2分であるのに対して、2015年は95.8分と大きく増加している。

1) 文部科学省、2002、「確かな学力向上のための2002アピール『学びのすすめ』」。

Q

あなたはふだん（月曜日～金曜日）、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。

図2-2-1 平日の学校外の学習時間（小学生・中学生・高校生、経年比較）



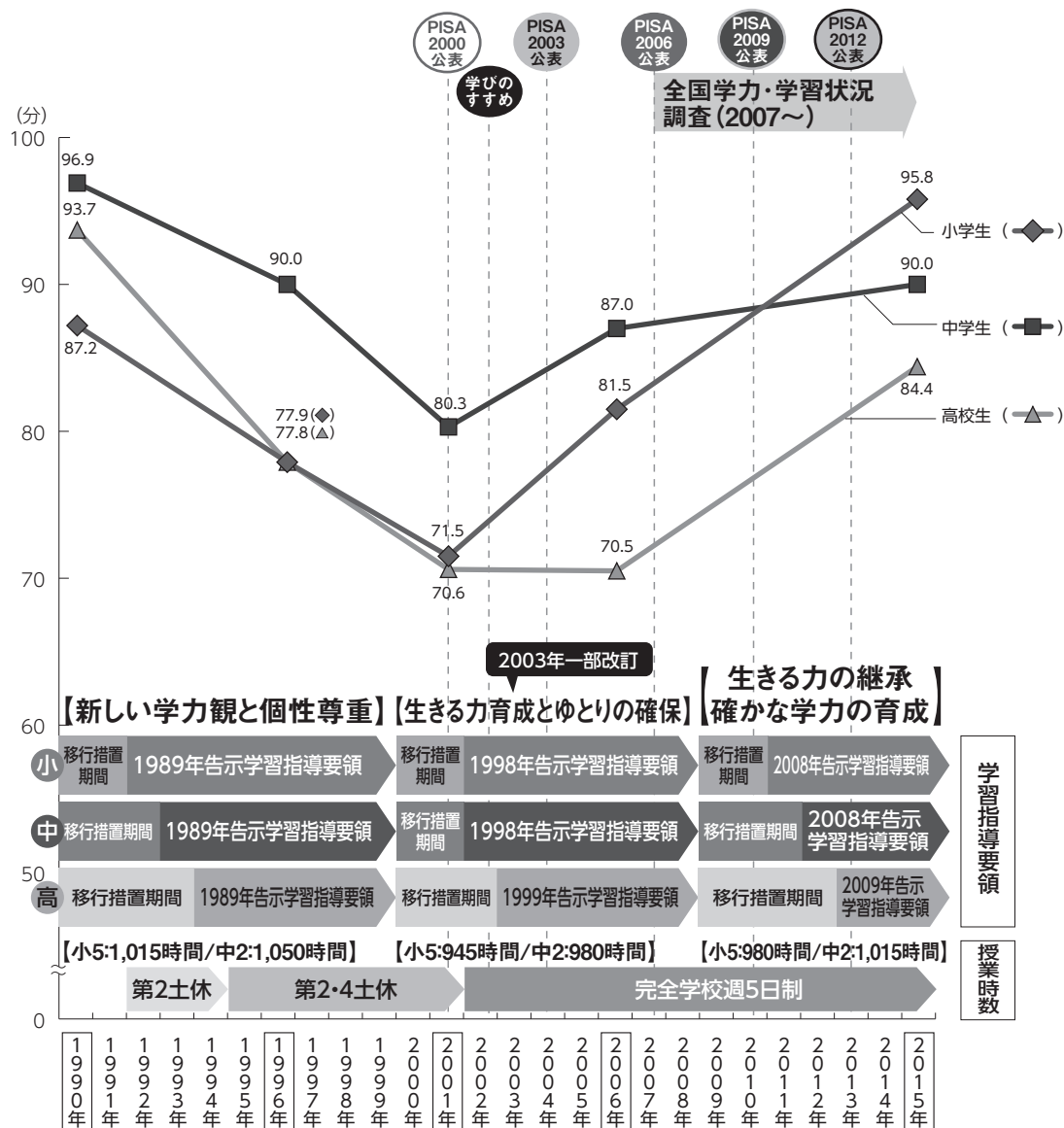
注 1) 平均時間は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分として、無回答・不明を除いて算出している。

注 2) 小学生には「あなたはふだん（月曜日～金曜日）、家に帰ってから1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間もふくめてください」とたずねている。

Q

あなたはふだん（月曜日～金曜日）、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。

図2-2-2 平日の学校外の平均学習時間と教育環境の変化（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注 1) 平日の学校外の平均学習時間は図2-2-1と同様に算出している。

注 2) 小学生には「あなたはふだん（月曜日～金曜日）、家に帰ってから1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間もふくめてください」と尋ねている。

●学習時間が緩やかに増加している中学生

中学生でも、2015年は「ほとんどしない」が8.3%で、2006年の12.7%、2001年の15.0%から減少している。小学生同様、1990年から2001年まで学習時間の減少が続いていたが、2006年は増加に転じ、2015年も小学生の数値ほど明確な増加はみられなかったものの、微増程度の伸びがみられる。平均時間を見ても、2015年は90.0分、2006年は87.0分、過去もっとも低かった2001年は80.3分と緩やかではあるが増加している。

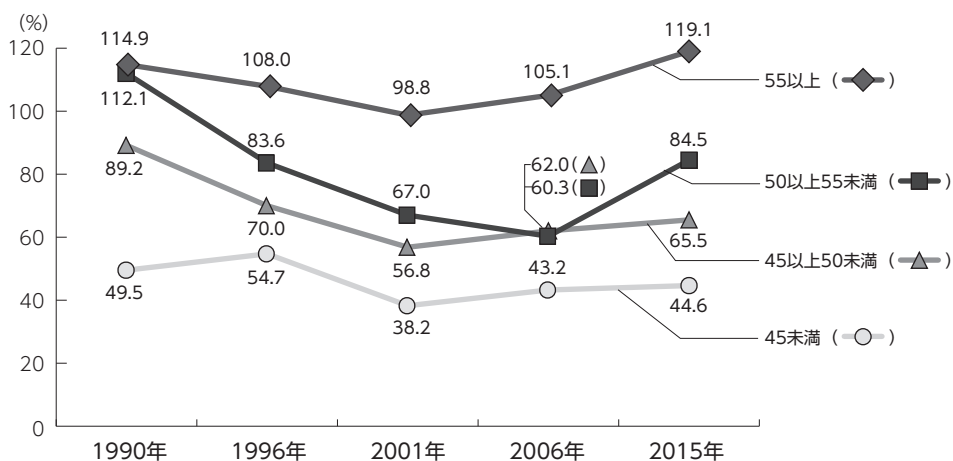
●平均学習時間が大幅に増加した高校生

学習時間の増加傾向は、高校生も同じである。高校生については、1990年から2006年まで減少し続けていたが、2015年で大きく増加に転じている。具体的には、2015年は「ほとんどしない」が14.8%で、2006年

の24.3%に比べて約1割減少した一方で、「1時間30分」「2時間」などでは増加しており、長時間学習する生徒が増えていることがうかがえる。平均時間でみても、2015年は84.4分で、2006年の70.5分に比べて約15分増えている。

これについて、学校偏差値帯別にさらにくわしくみると（図2-2-3）、いずれの偏差値帯でも2006年から2015年にかけて平均学習時間は増加しているが、「45未満」では1.4ポイント増、「45以上50未満」では3.5ポイント増と小幅な増加であったのに対し、「50以上55未満」では24.2ポイント増、「55以上」では14.0ポイント増と、学校偏差値帯の高い高校生で大きく増加したことが平均学習時間を引き上げていることがわかる。

図2-2-3 平日の学校外の平均学習時間（高校生・学校偏差値帯別、経年比較）



注) 平日の学校外の平均学習時間は図2-2-1と同様に算出している。

2) 休日の学習時間

●休日に勉強しない子が減少、平均学習時間は大幅に増加

次に、休日の学習時間についてみてみよう(図2-2-4)。休日も、前項の平日同様、「ほとんどしない」子どもが2006年に比べて減少し、これまでの調査でもっとも少ない比率となっている。学習時間の平均値でも、小・中・高校生ともに増加しているが、小・中学生が2001年から2006年にかけて大きく増加したのに対し、高校生では2006年から2015年にかけての増加の幅が大きい。

●休日に長時間学習する小学生が増加

次に、小・中・高校生それぞれをくわしくみると、小学生では、1990年からの学習時間の減少が2001年で底を打ち、2006年から増加している。具体的には、「ほとんどしない」が2006年20.5%に対して2015年16.2%と微減、また、「およそ30分」は2006年27.7%に対して2015年22.0%と約5ポイント減少している。「1時間」やそれ以上の学習時間では、ほとんどの選択肢で2006年より増加しており、休日の学習時間も平日同様に長時間化している様子がみられる。学習時間の平均も、2001年に比べると2015年は約30分増加している。

●休日に学習しない中学生は減少

中学生でも、2015年は「ほとんどしない」が17.1%で、2006年25.6%、2001年34.2%から大きく減少している。学習時間の平均値をみると、2001年55.7分、2006年78.3分、そして2015年89.9分と、小学生同様、中学生の休日の学習時間も大きく増加していることがわかる。

●休日に3時間以上学習する高校生が増加 高校生も、小・中学生同様、「ほとんどし

ない」が2006年27.3%に対して2015年15.2%と10ポイント以上減少している。一方で、「3時間」は2006年10.7%に対して2015年15.0%など、「2時間」以上の項目がいずれも増加している。「3時間」以上の比率の合計をみると、2006年は23.7%だったのに対し、2015年は32.9%と約1割増えている。3人に1人が休日に3時間以上、学習していることになり、学習しない生徒の減少とあいまって全体の数値を引き上げている。平均時間でみると、2001年87.1分、2006年92.0分であったのに対し、2015年117.9分と大幅に増加している。

3) 宿題の時間

●宿題の時間が学習時間に占める割合も増加

ここまで平日、休日の学校外での学習時間全体についてみてきたが、次に平日の学習時間のうち宿題をする時間について2006年との比較からみてみたい(図2-2-5)。小・中・高校生のいずれも「ほとんどしない」「15分」「30分」が減少し、「45分」以上での増加がみられる。

次に平日の学習時間のうち、宿題の時間の占める比率をみると(図2-2-6)、小・中学生では約5割、高校生では約65%を占めている。また、平日の学習時間と宿題にかかる時間それぞれについて、2006年から2015年への増加の幅をみると、小・中・高校生のいずれでも、宿題の時間の増加が平日の学習時間を押し上げていることがわかる。

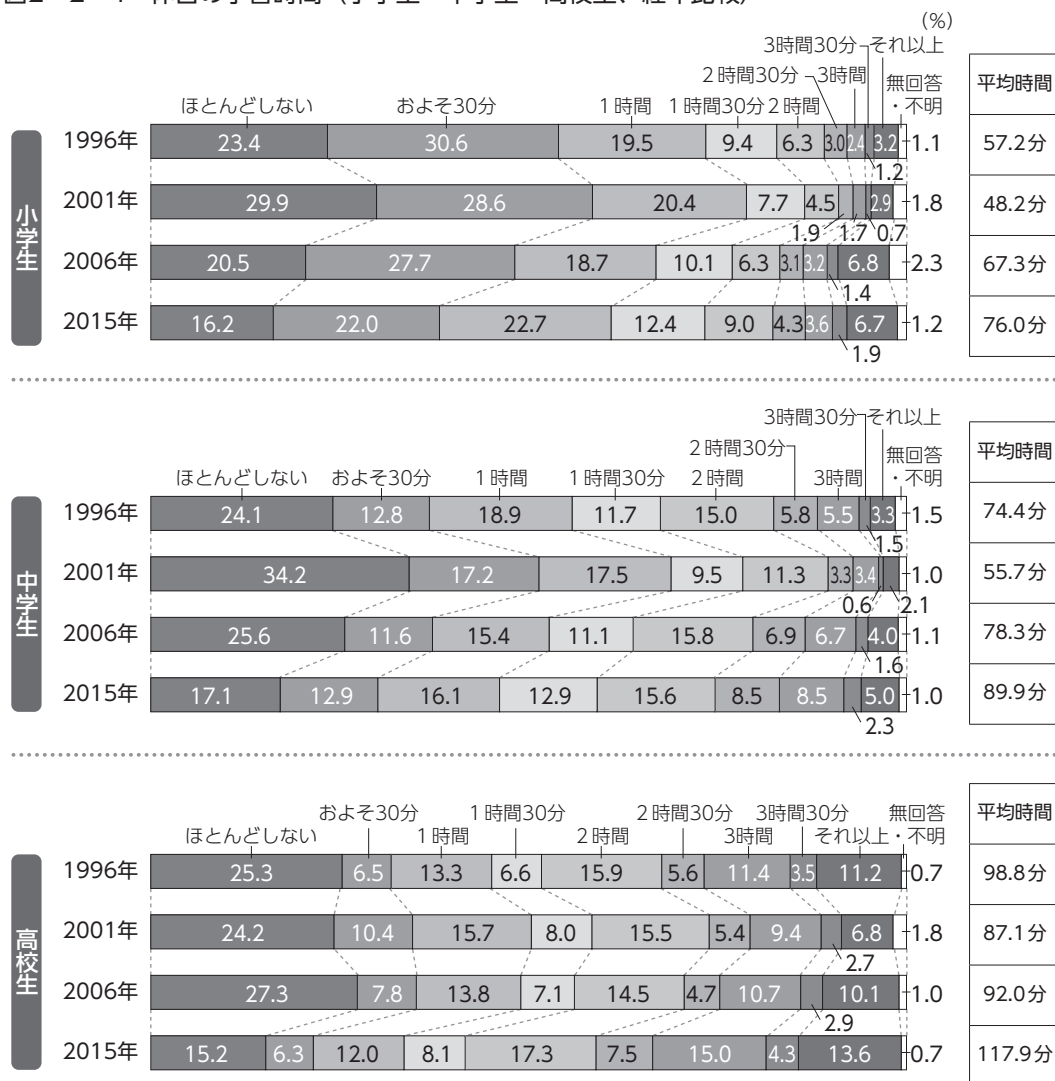
●宿題の時間が長時間化する小学生

小学生では、「15分」が2006年23.3%→2015年10.5%、「30分」が2006年35.9%→2015年26.0%と大きく減少している。一方で、「1時間」が2006年13.9%→2015年26.1%、「1時間30分」も2006年3.6%→2015年10.0%

Q

休日には、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。

図2-2-4 休日の学習時間（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注1) 休日の平均学習時間は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分として、無回答・不明を除いて算出している。

注2) 小学生には、「休日には、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間もふくめてください」とたずねている。また、1996年、2001年では「日曜日は、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間もふくめてください」とたずねている。

注3) 中学生・高校生には、1996年、2001年では「日曜日は、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください」とたずねている。

と大きく増加している。これまでの30分程度で終わる宿題から1時間以上かける宿題に変わってきているようだが、それが宿題のどのような変化によるものなのかについては、次節の宿題の種類についての項目でくわしく述べる。なお、平均時間も2006年36.4分から2015年49.8分と13.4分増加している。

●中学生の宿題の時間も長時間化

中学生では、「30分」が2006年33.6%→2015年26.4%と減少している一方、「45分」以上の各項目は微増しており、平均時間でみると2006年38.7分→2015年45.3分と、6.6分増加している。

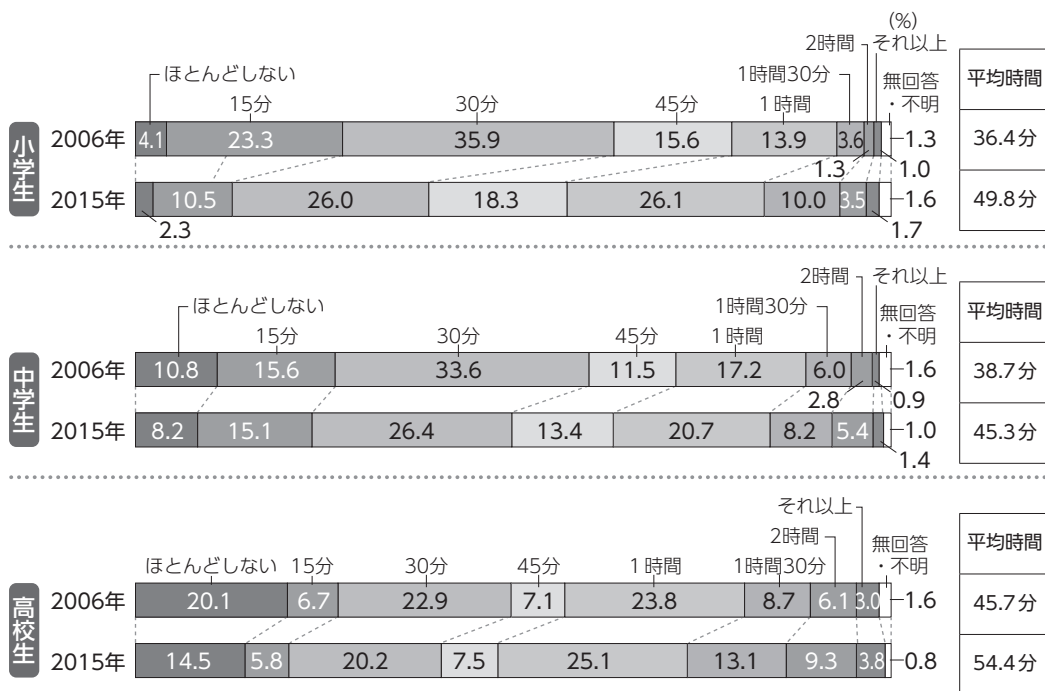
●高校生の平日の学習時間の3分の2は宿題

高校生では、平均時間としては、2006年45.7分→2015年54.4分と8.7分増加している。また、項目別にみると「30分」以下の項目では微減しており、「45分」以上の項目は増加している。とくに、「1時間30分」以上の項目を合計した数値は、2006年17.8%→2015年26.2%と増えている。

平日の学習時間のうち宿題の時間の占める比率は64.5%と、小・中学生に比べて高い。平日の学校外での学習と宿題の平均時間について、2006年から2015年への変化をみてみると、それぞれ13.9分、8.7分増加しており、宿題の時間の増加が学校外の学習時間を押し上げている。

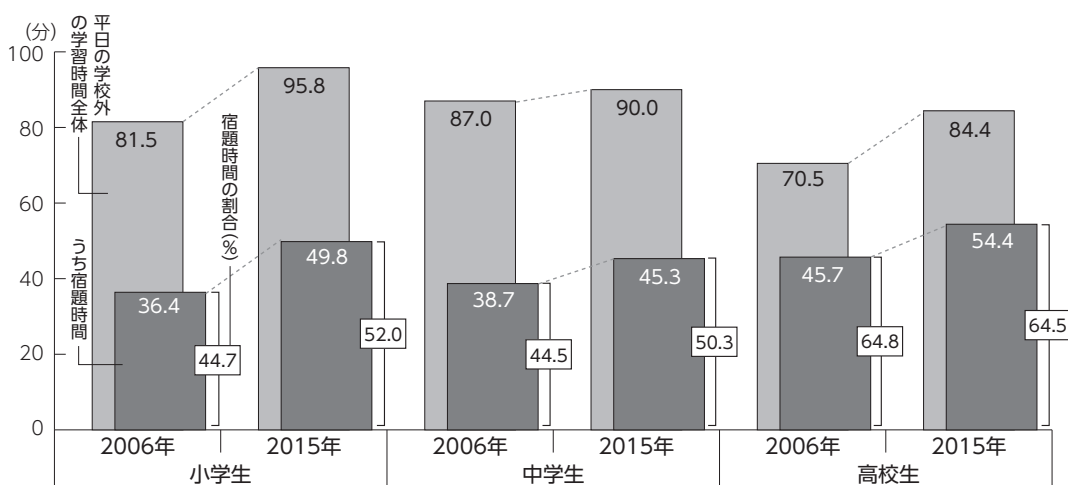
平日の学校外の学習時間で答えた勉強時間のうち、学校の宿題や課題をする時間は何時間くらいですか。

図2-2-5 平日の学校外の学習時間のうち宿題に使う時間（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注）平均時間は「ほとんどしない」を0分、「2時間」を120分、「それ以上」を150分として、無回答・不明を除いて算出している。

図2-2-6 平日の学習時間のうち宿題の時間の占める割合（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注）平日の学校外学習時間の平均は図2-2-1と同様に、宿題の時間の平均は図2-2-6と同様に算出している。

3

宿題の種類

宿題の種類では「プリントやドリル」が小・中・高校生のいずれでも高い比率を占めた。また、小・中学生では「自学ノートなど自主的な学習」も「週4日以上」取り組む比率が高く、日々の宿題として定着していることがわかる。一方で、「作文や小論文」（小学生は「作文」のみ）、「調べ学習・レポート」（小学生は「調べ学習」のみ）については、小学生は毎週取り組んでいる比率が3割を超えているものの、中・高校生では1割前後だった。

前節では、小・中・高校生のいずれにおいても学習時間が増加しており、その大きな要因として宿題の時間が増加していたことを確認した。本調査では2015年に宿題の種類とその頻度をたずねる項目を新たに加えている。本節では、その結果から宿題の種類についてくわしくみることで、子どもたちの学校外の学習について探ってみたい。

●多様な宿題に取り組む小学生、調べ学習・作文等の宿題が少ない中・高校生

宿題の内容として、小・中・高校生いずれにおいても取り組まれている比率が高かったのは「プリントやドリル」で、小学生では52.6%、中学生では21.5%、高校生では35.7%が「週4日以上取り組んでいる」と答えている（図2-3-1）。また、高校生にはたずねていないが、小・中学生では「自学ノートなど自主的な学習」についてもたずねている。これも小学生では42.6%、中学生では53.4%が「週4日以上」と答えている。小学生は、「作文」「調べ学習」も週1日以上取り組んでいる比率が3割以上と比較的高く、日常的な宿題といえそうだが、中・高校生については、その比率は1割前後にとどまる。今後、アクティブ・ラーニングや探究的な学びが学校教育の中で推進されることで、中・高校生の宿題にも変化が生まれるのか、気になるところである。

また、ここでは図で示さないが、地域別にみると、とくに「自学ノートなど自主的な学習」では違いが大きく、「大都市（東京23区）」よりも「地方都市（四国の県庁所在地）」、さらに「地方都市」よりも「郡部（東北地方）」の方が高い比率で取り組まれているようである。この違いについては、今後さらに精査していきたい。

なお、この質問項目では、子どもが宿題として取り組んでいる内容・頻度をたずねており、学校から出された宿題の内容・頻度をたずねているわけではない。宿題として出されても子どもが取り組まなければ数値に反映されないことになる。このため、参考までに宿題の取り組みの様子についてたずねた別の質問項目（「出された宿題をきちんとやっている」）の結果をみてみたところ（図2-3-2）、小学生では95.9%が「あてはまる」「まああてはまる」と答えており、中・高校生も同様に9割前後と高い比率となっている。

●小学生は「プリントやドリル」はじめ多様な宿題に取り組む

小学生では、「週4日以上」取り組む宿題として「プリントやドリル」52.6%、「自学ノートなど自主的な学習」42.6%があげられる。つまり、半数程度の小学生が、ほぼ毎日プリントやドリル、自学ノートなどに取り組む

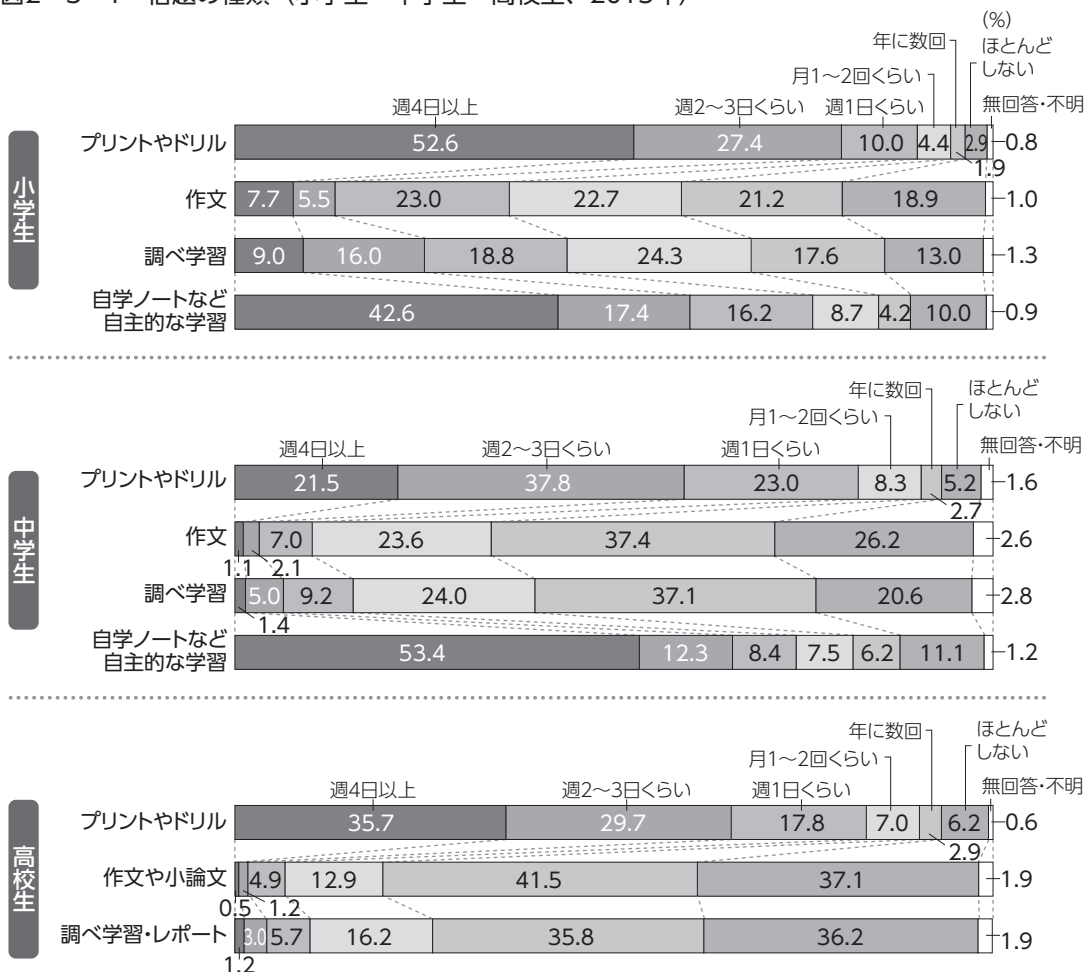
んでいることになる。プリントやドリルなどよりも手がかかるイメージがある「作文」「調べ学習」も、「週1日くらい」「週2～3日くらい」「週4日以上」の合計でみると、「作文」36.2%、「調べ学習」43.8%である。「作文」「調

べ学習」の宿題に毎週取り組んでいる子どもが約3～4割いることになる。中・高校生と比べると、日々、多様な宿題に取り組んでいる様子がうかがわれる。

Q

学校の宿題についてうかがいます。
あなたはふだん、次のような宿題をどのくらいしていますか。

図2-3-1 宿題の種類（小学生・中学生・高校生、2015年）



●中学生がもっとも取り組む宿題は「自学ノートなど自主的な学習」

中学生では、「週4日以上」取り組む宿題として「自学ノートなど自主的な学習」が53.4%と他の項目に比べて圧倒的に多く、次いで「プリントやドリル」が21.5%となっている。これに「週2～3日くらい」「週1日くらい」を加えると、「プリントやドリル」が82.3%、「自学ノートなど自主的な学習」が74.1%で、ほとんどの生徒が宿題として取り組んでいるのが「プリントやドリル」「自学ノートなど自主的な学習」であることがわかる。

一方で、「作文や小論文」「調べ学習・レポート」についても「週4日以上」「週2～3日くらい」「週1日くらい」の合計でみると、「作文や小論文」は10.2%、「調べ学習・レポート」は15.6%、もっとも多いのは「年に数回」でいずれの項目も約4割と、「作文や小論文」「調べ学習・レポート」は日常的な宿題ではないことがわかる。しかし、見方を変えれば、

1割以上の中学生が毎週、このような手のかかる宿題をしている、ともいえる。

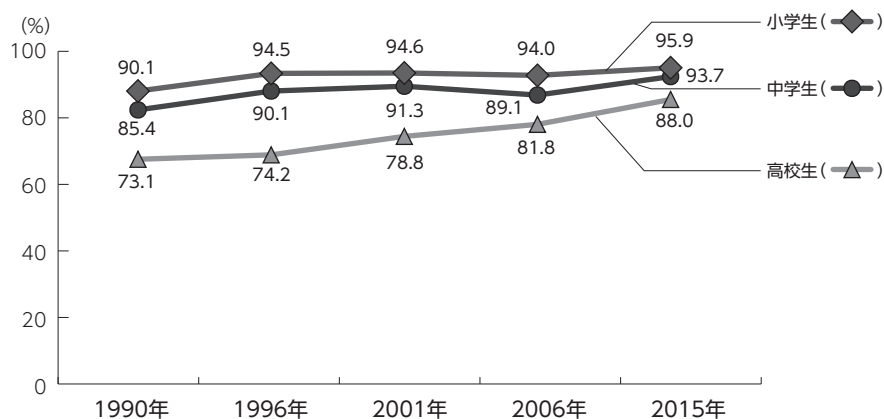
●高校生の3分の1がほぼ毎日「プリントやドリル」

高校生では、「プリントやドリル」に「週4日以上」取り組んでいる比率が35.7%と、約3分の1を占めている。高校生に対しては「自学ノートなど自主的な学習」についてはたずねていないため、その他としては「作文や小論文」「調べ学習・レポート」となるが、いずれも週1日以上（「週4日以上」「週2～3日くらい」「週1日くらい」の合計）取り組んでいる比率は1割に満たず、多くが「年に数回」「ほとんどしない」という回答だった。高校生の学校外の学習時間は2015年に大きく伸びており、そのうち宿題の時間が占める割合も約3分の2と、小・中学生と比べてもその比重は大きかったが、宿題の種類については今回たずねた項目の中では「プリントやドリル」が多くなっている。

Q

家での勉強のようすについてうかがいます。
「出された宿題をきちんとやっていく」

図2-3-2 「出された宿題をきちんとやっていく」比率（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注）「あてはまる」＋「まああてはまる」の比率。

中学生では、漢字や英単語などをくり返し書く学習方法を「よくする」「ときどきする」割合が8割を超え、それ以外でも学校の授業に対応した学習を行う様子がみられる。この傾向は高校生も同じだが、高校生では「プリントや問題集で数学の問題練習をする」が9割を超えている。学習方法によっては性別、成績別などで回答傾向に違いがみられた。

本節では、中・高校生に対して家庭での勉強のしかたをたずねた結果についてみていきたい（図2-4-1）。

●中・高校生の学習方法は「くり返し書く」「問題演習」

中学生では、漢字や英単語などをくり返し書く学習方法を「よくする」「ときどきする」比率が8割以上で、それ以外でも学校の授業に対応した学習を行う様子がみられる。この傾向は高校生も同じだが、高校生では「プリントや問題集で数学の問題練習をする」が9割を超えている。経年での推移をみると、ほとんどの学習方法では2006年より増加しており、多様な方法で学習している姿がみられる。一方で、辞書や教科書ガイドの活用は、とくに高校生で1990年よりも1～2割ほど減少している。ここでは図表で示さないが、さらにくわしく結果をみると、項目によっては性別や成績等により回答傾向に違いがあるようだ。

●中学生は「くり返し」「教科書」中心の学習方法

まず、2015年のみの数値をみると、「よくする」「時々する」の合計が高かったのは、①「漢字をくり返し書いて覚える」81.2%、②「プリントや問題集で数学の問題練習をする」80.9%、③「英単語をくり返し書いて覚える」80.0%、④「教科書やテキストをくり

返し読む」76.3%、⑤「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」74.6%であった。並べてみると「くり返し」「教科書」など、中学生の学習方法の特徴を表す語が繰り返されている。

次に、2006年との比較では、すべての項目で2006年よりも高い比率となっており、学習時間の増加とあいまって多様な方法で家庭での学習を進めている様子がみてとれる。また、「教科書やテキストをくり返し読む」では2006年57.2%に対して2015年76.3%と19.1ポイント増加、「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」では2006年61.5%に対して2015年74.6%と13.1ポイント増加している。学校での学習内容を家庭でもくり返し学習する様子がみてとれる。

1990年から時系列での推移をみると、2006年までは全体的に停滞、もしくは減少していたが、2015年で増加に転じた項目が多かった。とくに「教科書やテキストをくり返し読む」は1990年に比べて28.5ポイント増加している。また、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」も同様に16.3ポイント増加している。一方で、「辞書（英語・国語など）を引く」は、2006年からやや持ち直したものの、1990年に比べて12.6ポイント減少している。

なお、ここでは図表で示さないが、漢字や英単語を「くり返し書いて覚える」ことや「プ

プリントや問題集で数学の問題練習をする」「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」のは男子よりは女子の方が、成績下位よりは成績上位の方が「よくする」「時々する」比率が高かった。

●「くり返し」「教科書」に加え「参考書」の利用も多い高校生

高校生も同様に、まずは2015年のみの数値を見てみると、「よくする」「時々する」の合計がもっとも高かったのは、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」90.6%で、ほぼすべての高校生といえる比率である。これに「教科書やテキストをくり返し読む」78.0%、「英単語をくり返し書いて覚える」68.7%、「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」68.1%が続く。また、中学生に比べると「参考書を読む」「辞書（英語・国語など）を引く」の比率が15ポイント前後高いのも特徴である。

2006年との比較では、おおむねどの項目でも2006年よりは「よくする」「時々する」の比率が増えている。とくに、「参考書を読む」では2006年37.2%に対して2015年55.2%で18.0ポイント増加、「教科書やテキストを

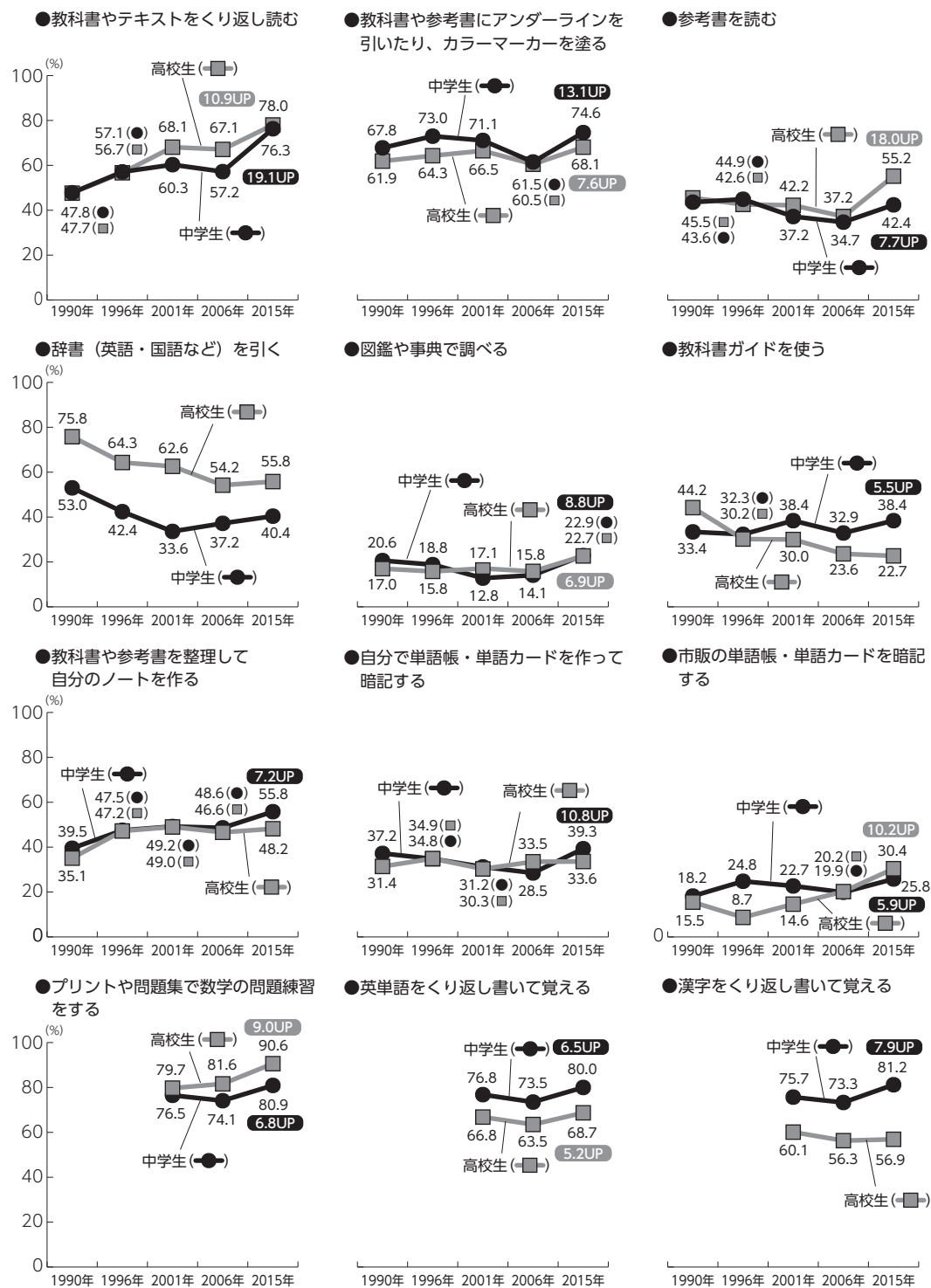
くり返し読む」も2006年67.1%に対して2015年は78.0%と10.9ポイント増加している。

また、1990年からの推移でみると、「教科書やテキストをくり返し読む」の比率は増加を続け、1990年との比較では約3割増えている。「参考書を読む」「市販の単語帳・単語カードを暗記する」も減少・横ばいの傾向はあったものの、1990年に比べて10～15%ほど増加している。一方で、「辞書（英語・国語など）を引く」「教科書ガイドを使う」では減少傾向が続いており、1990年との比較でもそれぞれ約2割減少している。

なお、ここでは図表で示さないが、漢字や英単語を「くり返し書いて覚える」ことや「市販の単語帳・単語カードを暗記する」「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」「教科書やテキストをくり返し読む」などでは、男子よりは女子の方が、「参考書を読む」「辞書（英語・国語など）を引く」「市販の単語帳・単語カードを暗記する」では学校偏差値帯が55以上の学校の方が、それ以外の学校よりも「よくする」「時々する」比率が高かった。

家では、どんな勉強の仕方をする人が多いですか（パソコン、スマートフォン、タブレットなどの機器を利用した場合も含みます）。

図2-4-1 学習の方法（中学生・高校生、経年比較）



注1) 「よくする」 + 「時々する」の比率。

注2) 「○○UP」は2006年と2015年を比べて5ポイント以上の増加がある場合にそのポイントを記載。

5

学習方法のタイプ

中・高校生で共通して「学校で使う教材中心」「復習中心」に家庭学習を進めており、その傾向は以前より強まっている。中学生では、「毎日こつこつ勉強する」比率が以前よりも高くなっており、また高校生では「復習中心」の比率が高くなっている。性別や成績によって学習スタイルが異なる項目もみられた。

前節までで、子どもたちの学校外の学習時間が増加し、学習方法についてもくり返し書く、教科書に準じたものが増えていることがわかったが、子どもたちの学習方法のタイプにも変化はあるのだろうか。本節では中・高校生に対して、自分自身の学習方法のタイプについてたずねた結果をみてみたい。

●中・高校生の学習方法は「学校で使う教材」「復習」中心

本調査では、1990年から中・高校生に対して「あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになると思いますか」という質問項目で、学習方法のタイプについてたずねている（図2-5-1、2）。まず、2015年の結果についてみてみたところ、中・高校生に共通しているのは「学校で使う教材中心」「復習中心」で家庭での学習を進めている点だ。学校の授業内容や試験に重点をおいた学習方法となっている。次に、各項目について第1回からの時系列の推移をみたところ、中・高校生ともに一部の項目を除いては、全体的には大きな変化はみられなかった。変化のあった項目を取り出してみると、やはり学校の授業や教科書の内容に関する学習が重視されていることがわかる。

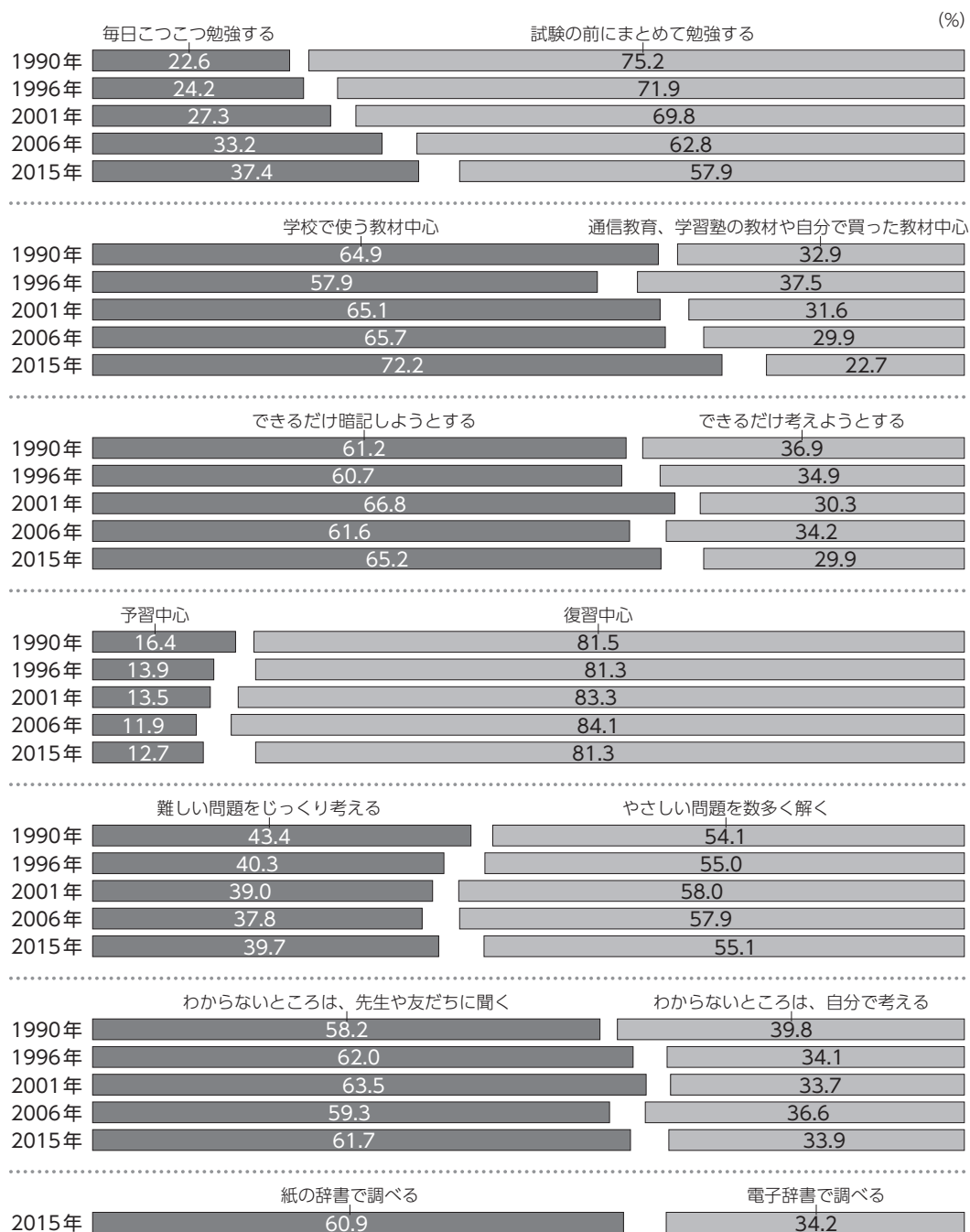
また、中・高校生それぞれに、性別、成績の自己評価別(中学生)、学校の偏差値帯別(高校生)に異なる傾向を示す項目があった。性別による傾向の違いは、中・高校生ともに「わ

からないところは、先生や友だちに聞く」で男子よりも女子の方が高いという傾向がみられた。成績の自己評価や学校の偏差値帯別では、成績上位や偏差値55以上のみ異なる学習方法のタイプがみられる項目があった。中学生では「やさしい問題を数多く解く」よりも「難しい問題をじっくり考える」、高校生では「できるだけ暗記しようとする」よりも「できるだけ考えようとする」が成績上位や偏差値55以上では高い比率を占めているが、他の群では逆の結果となっている。

●中学生では「毎日こつこつ勉強する」生徒が増加

2015年の結果から、どのような学習方法のタイプが多いのかをみてみよう。差が大きい順に、①「予習中心」(12.7%) < 「復習中心」(81.3%)、②「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(22.7%) < 「学校で使う教材中心」(72.2%)、③「できるだけ考えようとする」(29.9%) < 「できるだけ暗記しようとする」(65.2%)、④「わからないところは、自分で考える」(33.9%) < 「わからないところは、先生や友だちに聞く」(61.7%)、⑤「電子辞書で調べる」(34.2%) < 「紙の辞書で調べる」(60.9%)、⑥「毎日こつこつ勉強する」(37.4%) < 「試験の前にまとめて勉強する」(57.9%)、⑦「難しい問題をじっくり考える」(39.7%) < 「やさしい問題を数多く解く」(55.1%) となって

図2-5-1 学習方法のタイプ（中学生、経年比較）



注 1) 無回答・不明は省略している。そのため、足しても 100.0% にならない。

注 2) 「紙の辞書で調べる」「電子辞書で調べる」は 2015 年のみたずねている。

いる。学校の授業で学ぶ内容に重点をおいて学習を進めている姿がみてとれる。

次に、2006年との比較でみたところ、「学校で使う教材中心」か「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」か、をたずねる質問で、「学校で使う教材中心」が2006年65.7%に対して2015年72.2%と、6.5ポイント増加している。1990年から「学校で使う教材中心」の比率の方が多かったが、その傾向が強まったといえる。また、「毎日こつこつ勉強する」か「試験の前にまとめて勉強する」か、をたずねる質問では、「毎日こつこつ勉強する」が1990年から回を追うごとに増加してきており、1990年と2015年を比較すると14.8ポイント増加している。学習を計画的に進める子どもが増えてきているようである。

なお、図表では示さないが、「わからないところは先生や友だちに聞く」では男子よりも女子の方が10ポイント以上高い。また、成績の自己評価別にみると、成績上位では「やさしい問題を数多く解く」(44.8%)よりも「難しい問題をじっくり考える」(53.7%)だが、それ以外では「やさしい問題を数多く解く」の比率の方が多く、学力による学習方法のタイプに違いがみられた。

●「復習中心」の学習方法が増加した高校生

高校生についても、まずは2015年の結果から、どのような学習方法のタイプが多いのかをみてみよう。差が大きい順に、①「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(5.8%) < 「学校で使う教材中心」(92.5%)、②「毎日こつこつ勉強する」(21.6%) < 「試験の前にまとめて勉強する」(77.5%)、③「予習中心」(24.4%) < 「復習中心」(74.2%)、④「わからないところは、自分で考える」(36.7%) < 「わからないところは、先生や

友だちに聞く」(62.4%)、⑤「難しい問題をじっくり考える」(39.2%) < 「やさしい問題を数多く解く」(59.6%)、⑥「紙の辞書で調べる」(40.3%) < 「電子辞書で調べる」(58.8%)、⑦「できるだけ考えようとする」(44.2%) < 「できるだけ暗記しようとする」(55.1%)となっている。中学生同様、学校の授業内容中心に学習を進めているが、試験前に重点をおいた勉強の進め方をしている比率が中学生よりも高い。また、紙の辞書よりも電子辞書を使う比率が高い点も中学生とは異なるが、これは生徒が自分で選択した結果というよりも、学校の指導の違いによるものかもしれない。

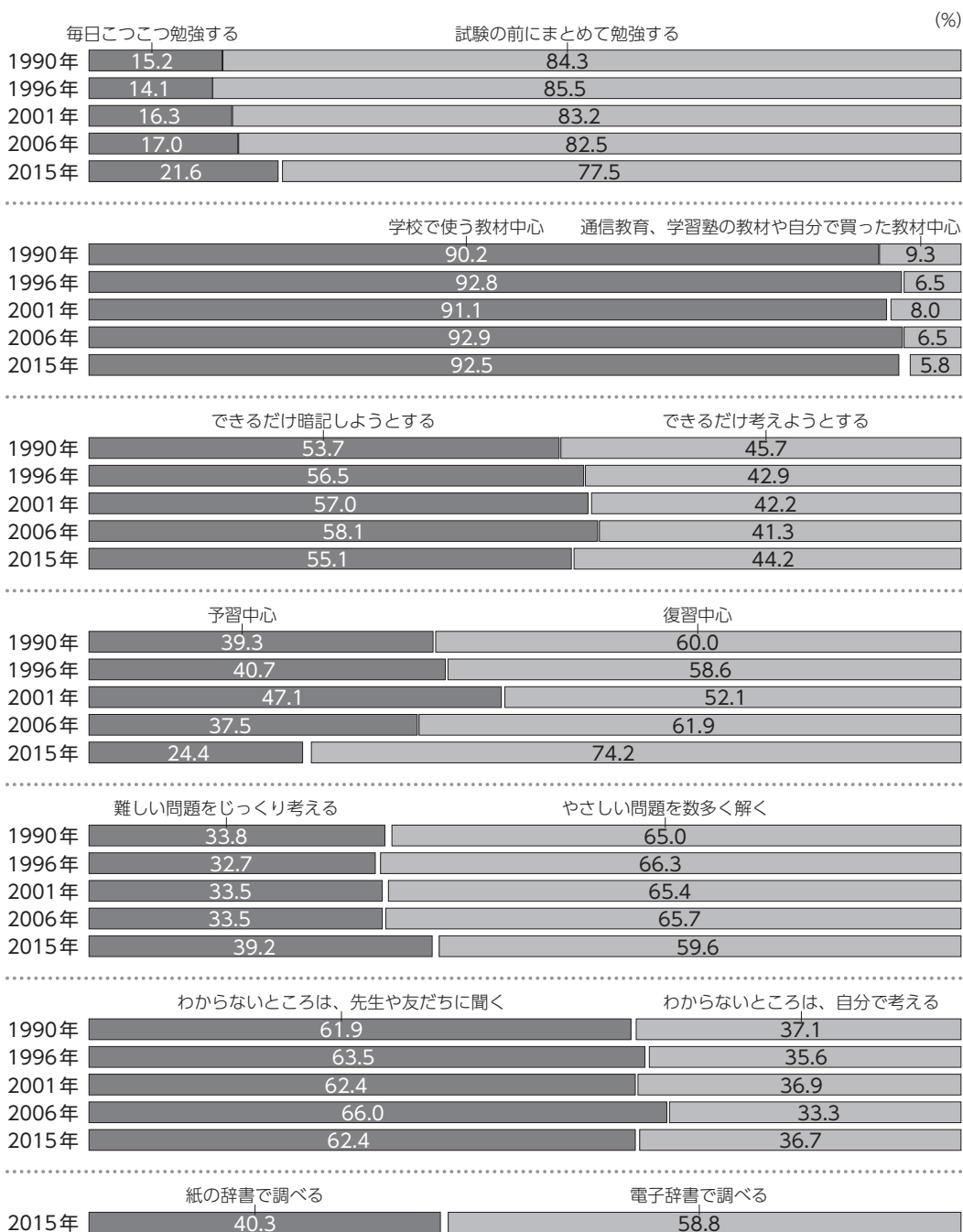
次に、2006年との比較でみると、「予習中心」か「復習中心」か、を問う質問で、「復習中心」が2006年61.9%→2015年74.2%と12.3ポイント増えており、1990年と比べても「復習中心」で14.2ポイント増えている。また、「難しい問題をじっくり考える」か「やさしい問題を数多く解く」か、を問う項目では「難しい問題をじっくり考える」が2006年33.5%→2015年39.2%と5.7ポイント増えている。

なお、図表では示さないが、「わからないところは、先生や友だちに聞く」では男子よりも女子の方が、「難しい問題をじっくり考える」「紙の辞書で調べる」では女子よりも男子の方が10ポイント以上高い。また、学校偏差値帯別にみると、偏差値「55以上」の学校では「できるだけ暗記しようとする」(45.7%)よりも「できるだけ考えようとする」(53.6%)が、それ以外では「できるだけ暗記しようとする」の比率の方が多く、学校偏差値による学習方法のタイプに違いがみられた。



あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになると思いますか。

図2-5-2 学習方法のタイプ（高校生、経年比較）



注 1) 無回答・不明は省略している。そのため、足しても 100.0% にならない。

注 2) 「紙の辞書で調べる」「電子辞書で調べる」は 2015 年のみたずねている。

6

家での勉強の様子

家での勉強の様子をみると、1990年に比べ、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」(「あてはまる」+「まああてはまる」、以下同)では小・中・高校生は20～40ポイント弱の増加となる。予習・復習をする比率も増加し、嫌いな科目の勉強を頑張る、家族に言われなくても自ら勉強するなど、この25年間で小・中・高校生の家での学習姿勢や態度がより真面目になっているといえる。一方、「携帯電話やスマートフォンを手元に置いたまま勉強する」と回答している中・高校生は多く(中学生4割、高校生約7割)、成績下位ほど、学校偏差値帯が低いほど回答比率が高い。

本節では、家での学習の態度や様子について検討する。項目が多いため、3つのグラフに経年推移の結果を示した。

●小・中・高校生の家での学習の態度がより真面目になっている

もう少し詳しくみてみると(図2-6-1)、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」の比率(「あてはまる」+「まああてはまる」、以下同)では小学生は1990年35.7%⇒2015年72.8%と、37.1ポイント増、中学生は33.3%⇒58.0%と、24.7ポイント増、高校生は21.4%⇒44.0%と、22.6ポイント増で、どの学校段階でも20ポイント以上と大きく増加している。同じ「調べる」関連の項目で、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」をみると、小学生は1990年に比べ、10.9ポイント増、中学生と高校生は2001年に比べ、中学生では13.9ポイント増、高校生では10.5ポイント増となっている。

近年、タブレットやスマートフォンの普及により、「調べる」のハードルが低くなったと考えられる。小・中・高校生にとっては気になることがあったら、すぐタブレットやスマートフォンで「調べる」ことができるため、今回の大幅な増加につながったと推測している。ICTメディアの発達は小・中・高校生

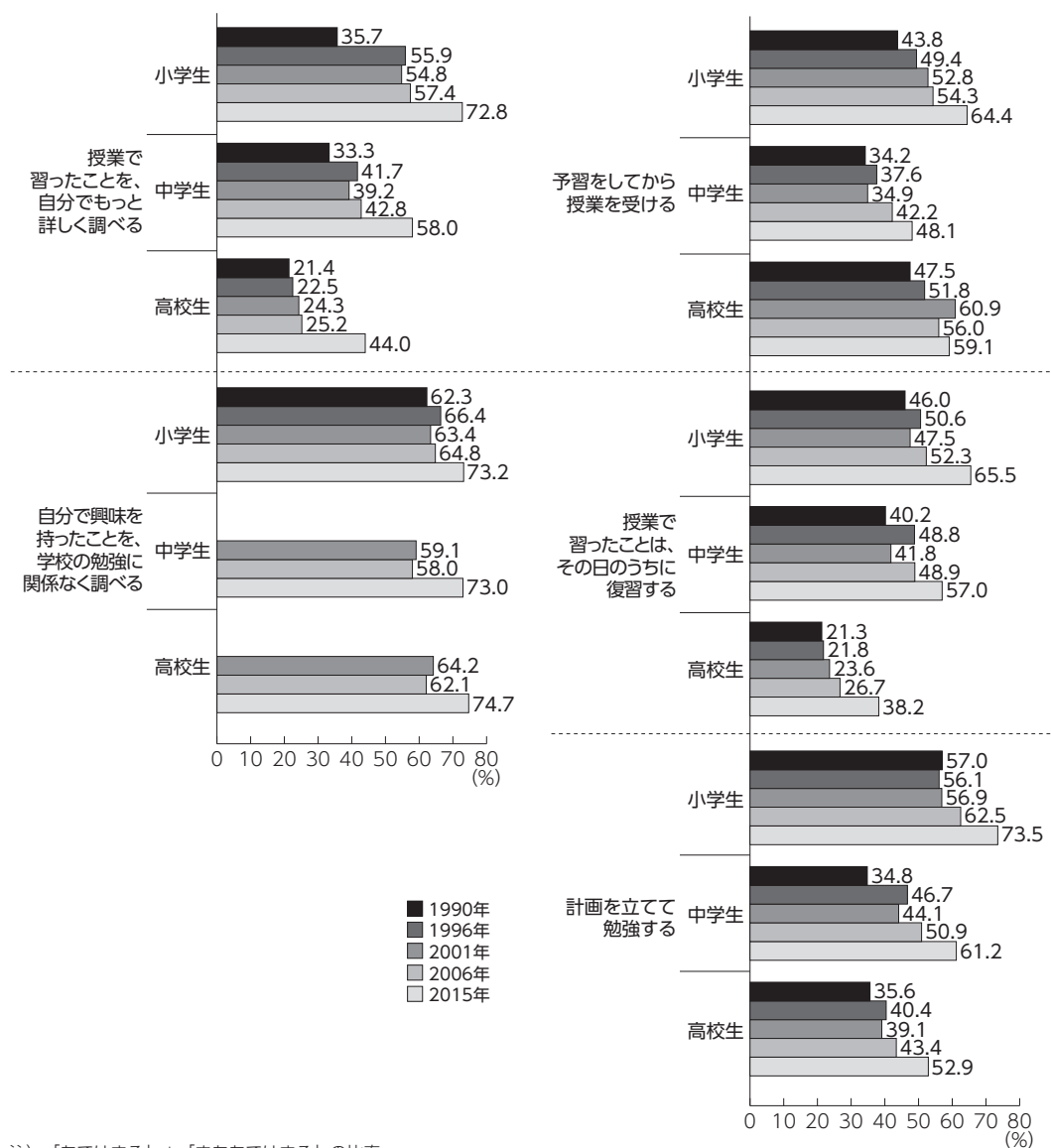
の学びを促した側面があるといえる。しかし、ICTメディアを利用して「調べる」にとどまらず、本のページをめくったり、足を運んで人の話を聞いたり、自分の目で確かめたりして、さまざまな方法で「調べる」ことも重要だろう。現状ではまだこのような深い学びに達していないのではないだろうか。学びの深化が課題だと考える。

次に、「予習をしてから授業を受ける」では、1990年に比べ、小学生は20.6ポイント増、中学生は13.9ポイント増、高校生は11.6ポイント増となる(図2-6-1)。2015年調査では6割の小学生、5割弱の中学生、6割弱の高校生が「予習をしてから授業を受ける」ことがわかる。「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」では、1990年から2015年まで、小学生は46.0%⇒65.5%と19.5ポイント増、中学生は40.2%⇒57.0%と16.8ポイント増、高校生は21.3%⇒38.2%と16.9ポイント増となる。この25年間で予習・復習という学習習慣を身につけた小・中・高校生が増えた。また「計画を立てて勉強する」は小学生16.5ポイント、中学生26.4ポイント、高校生は17.3ポイント増えた。小・中・高校生へのインタビューや学校へのヒアリングでは、計画的に勉強するように学校の先生に言われたり、テスト前に勉強の計画表を配られ、記入して提出したりし

ていることがわかっている。さらに塾の宿題も聞かれた。
が事実上の予習や復習になっているという声

Q 家での勉強の様子についてうかがいます。

図2-6-1 家での勉強の様子1（小学生・中学生・高校生、経年比較）



学習習慣を測る典型的な項目として、「出された宿題をきちんとやっていく」「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」「机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる」があげられる。この3項目の「あてはまる」+「まああてはまる」の数値も1990年に比べ、大きく上昇している（図2-6-2）。また87.0%の小学生（1990年に比べ15.8ポイント増）、78.9%の中学生（同21.9ポイント増）、73.2%の高校生（同27.3ポイント増）は「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」と回答している（図2-6-2）。

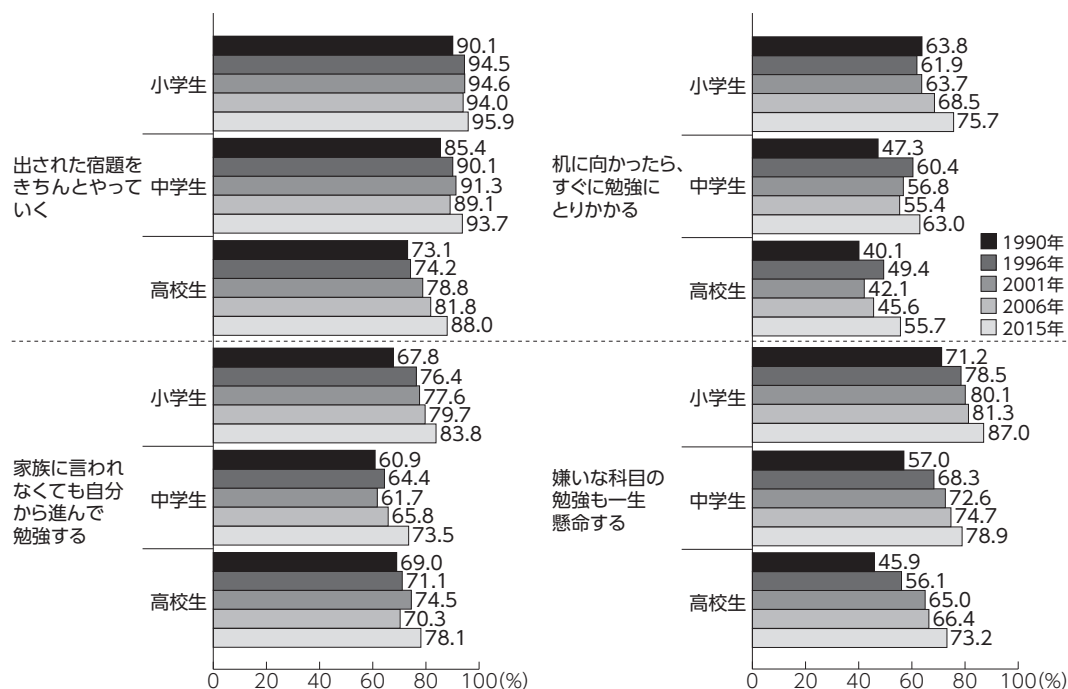
一方「『勉強は学校だけですればいい』と思う」は2001年に比べ、小学生で10.2ポイント減、中学生で7.3ポイント減、高校生は2.5ポイントと微減であった（図2-6-3）。

3）。つまり約8割の小学生、6割の中学生、6割5分の高校生は勉強は学校だけでは足りないと考えているということである。

さらにこの25年間で、「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」高校生が4割5分から、4割弱に減少していることがわかる（図2-6-3）。

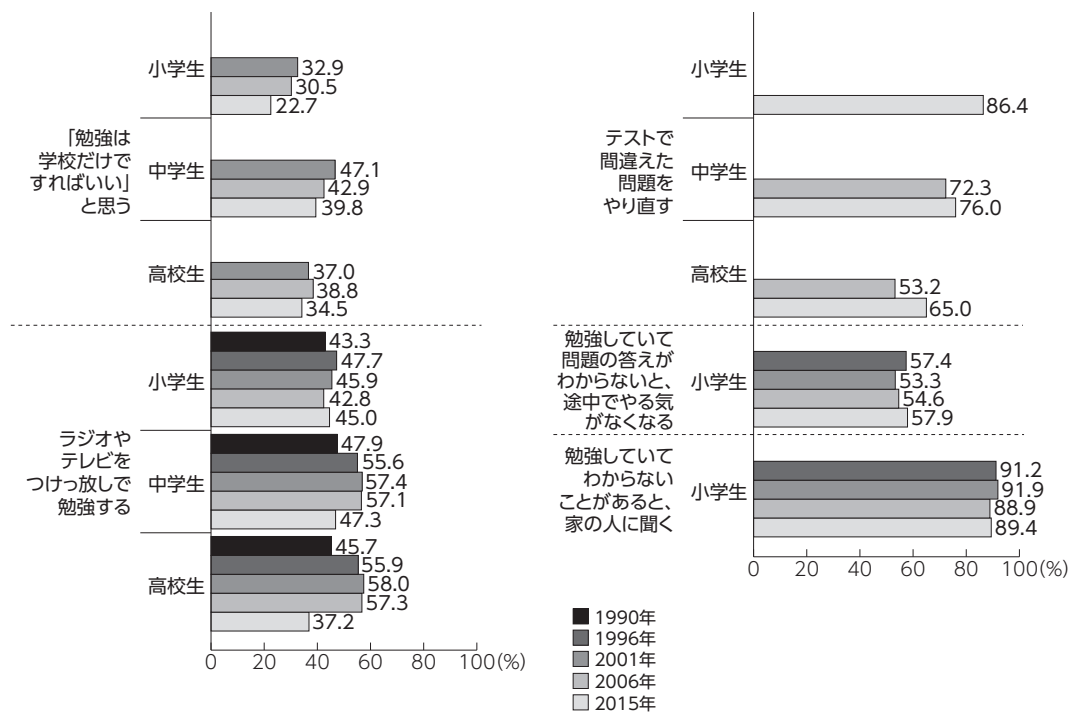
ここまで、経年での数値の推移をみてきた。多くの項目の数値の変化から小・中・高校生が家庭でより真面目に勉強に取り組む姿勢がうかがえる。一方、学校などにおける指導の強化が予習・復習・計画的な勉強の数値の上昇につながったと考えられる。したがって、まだ真の意味で自ら学ぶ力が育っているとはいえないだろう。

図2-6-2 家での勉強の様子2（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注) 「あてはまる」+「まああてはまる」の比率。

図2-6-3 家での勉強の様子3（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注1) 「あてはまる」 + 「まああてはまる」の比率。

注2) 「勉強は学校だけですればい」は小・中・高校生とも1990年、1996年にはたずねていない。

「テストで間違えた問題をやり直す」は小学生では、2015年のみたずねている。中・高校生は2006年、2015年にたずねている。「勉強していて問題の答えがわからないと、途中でやる気がなくなる」「勉強していてわからないことがあると、家の人に聞く」は小学生のみ、1996年からたずねている。

●「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」では成績や学校偏差値帯による差が拡大
「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」について、小・中学生の成績の自己評価別、高校生の学校偏差値帯別のデータを検討する。

まず、小学生については、25年間のうち、数値のもっとも高かった1996年（図2-6-3）と比較したい。図2-6-4①からは、成績の自己評価別でみると、成績上位は1996年41.4%⇒2015年34.1%と7.3ポイント減、成績中位は50.0%⇒48.2%とほぼ横ばいで、成績下位は51.4%⇒54.0%と2.6ポイント微増となる。成績上位と下位との差をみると、1996年では両者の差は10.0ポイントだったが、2015年では19.9ポイントと、差が大きく広がったといえる。

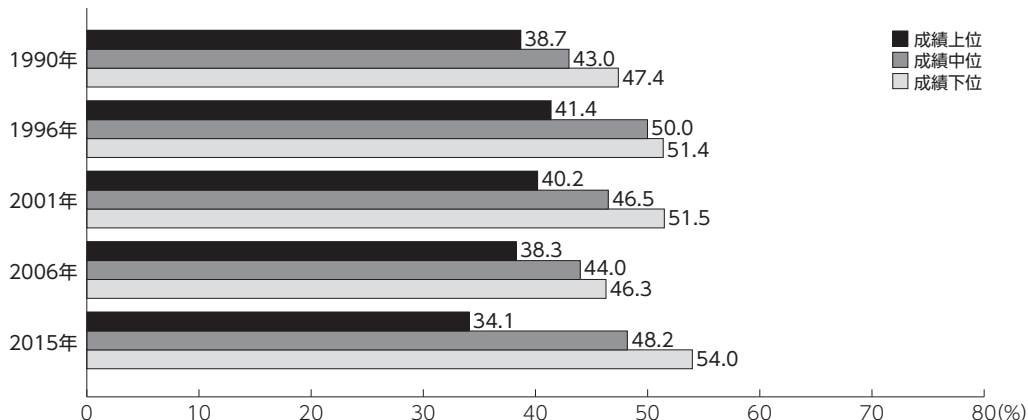
中学生では、25年間のうち、数値のもっとも高かった2001年と比較したい（図2-6-3）。どの成績層も「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」比率が減っているのが特徴である。詳しくみると、成績上位は

2001年52.4%⇒2015年38.8%と13.6ポイント減、成績中位は56.7%⇒47.9%と8.8ポイント減、成績下位は62.6%⇒54.8%と7.8ポイント減となる。小学生ほどではないが、成績層による差が広がっている（図2-6-4②）。成績上位と成績下位との差：2001年10.2ポイント差<2015年16.0ポイント差）。

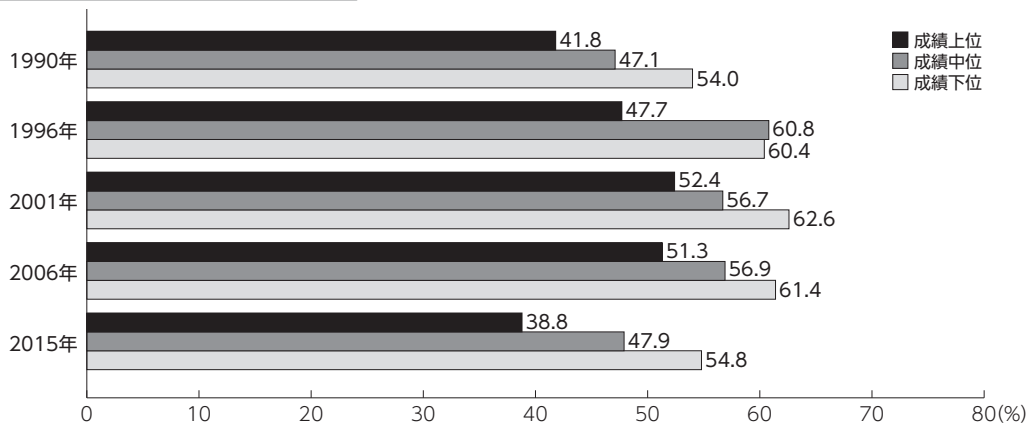
高校生については、中学生と同様に、全体数値がもっとも高かった2001年と比較すると、すべての学校偏差値帯において減少しているのが特徴である（図2-6-4）。ただし、減少幅をみると、偏差値55以上が23.4ポイント減（2001年53.0%⇒2015年29.6%）、50以上55未満が19.8ポイント減（59.1%⇒39.3%）、45以上50未満が25.0ポイント減（63.8%⇒38.8%）、45未満が15.2ポイント減（61.0%⇒45.8%）だった。結果的に偏差値55以上と45以上50未満との差は広がっていないが、55以上と50以上55未満との間、55以上と45未満との差が広がっている。

図2-6-4 「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」
(小学生・中学生・高校生、成績の自己評価別・学校偏差値帯別、経年比較)

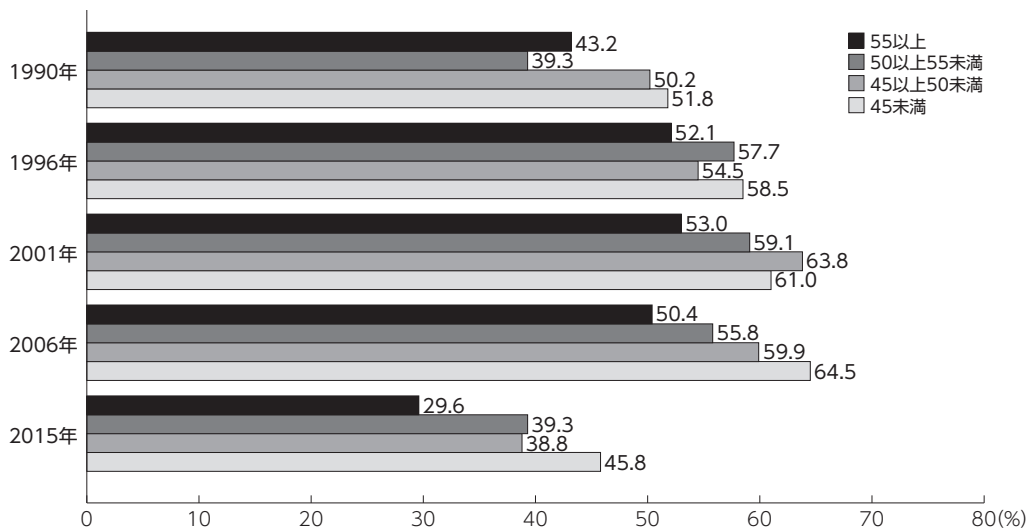
①小学生（成績の自己評価別）



②中学生（成績の自己評価別）



③高校生（学校偏差値帯別）



注1) 「あてはまる」 + 「まああてはまる」の比率。

注2) 小学生・中学生の成績の自己評価別の人数は図1-3-4・5注3 (p.63) を参照。

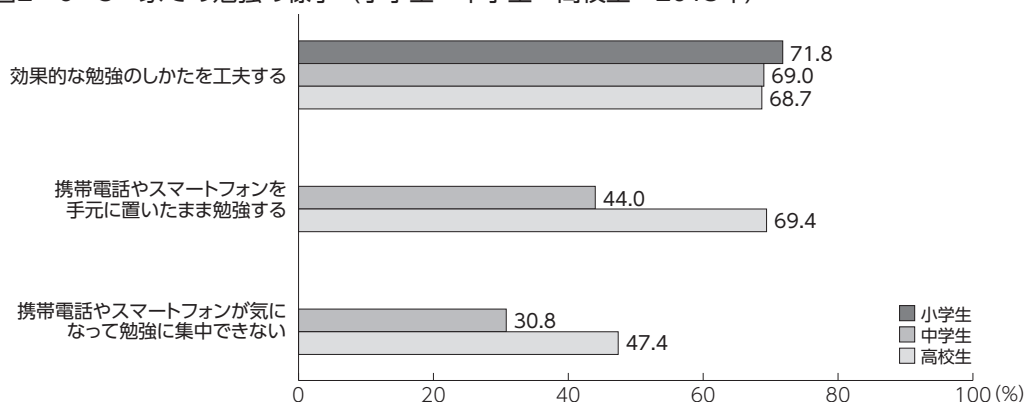
●「携帯電話やスマートフォンを手元に置いたまま勉強する」中学生は4割、高校生は7割弱

2015年調査では、学び方と携帯電話やスマートフォンに関する項目を追加した。新たに追加した3項目の結果は図2-6-5にまとめた。7割前後の小・中・高校生は「効果的な勉強のしかたを工夫する」と回答した（「あてはまる」+「まああてはまる」、以下同）。また携帯電話やスマートフォンに関する項目は中・高校生のみにとずねた。4割の中学生、7割弱の高校生は「携帯電話やスマートフォンを手元に置いたまま勉強する」と回答した。図2-6-3で確認した「ラジオやテレビをつけっ放しで勉強する」高校生が減っているデータとあわせて考えると、高校生はテレビをつけながらの勉強から、携帯電話やスマートフォンを手元に置いたままの勉強に移行しているのではないかと推測できる。スマートフォンで学習内容の検索などをするところもあるだろうが、本調査では「携帯電話やスマー

トフォンが気になって勉強に集中できない」と感じている中学生は3割、高校生は5割弱いることもわかっている。

「携帯電話やスマートフォンを手元に置いたまま勉強する」と「携帯電話やスマートフォンが気になって勉強に集中できない」の2項目について、中学生の成績自己評価別、高校生の学校偏差値帯別でみてみたのが図2-6-6である。2項目とも中学生では成績下位ほど、高校生では学校偏差値が低いほど、「あてはまる」+「まああてはまる」の比率が高くなる傾向である。とくに学校偏差値帯45未満の高校生の8割が「携帯電話やスマートフォンを手元に置いたまま勉強する」と回答し、約6割が「携帯電話やスマートフォンが気になって勉強に集中できない」と回答した。携帯電話やスマートフォンには勉強へのマイナス影響があることを考慮し、適切な使用ルールを家庭内で話し合うことも重要だと考える。

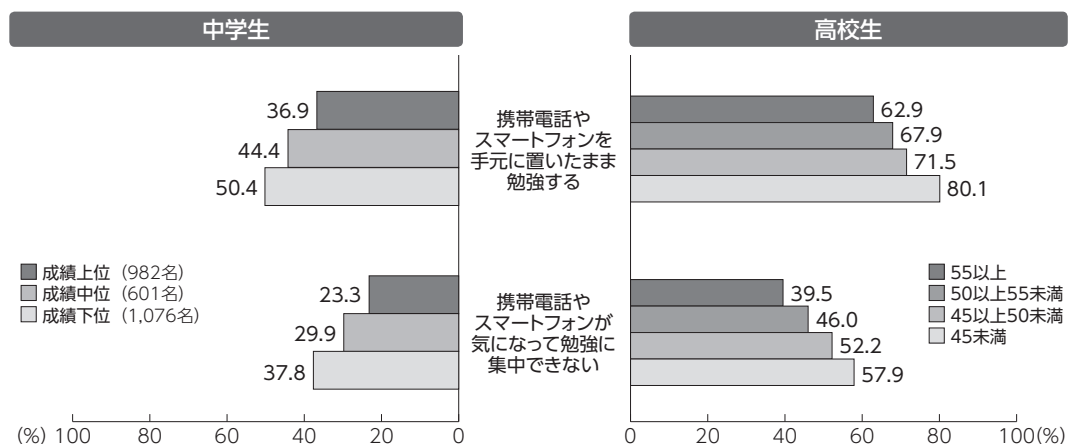
図2-6-5 家での勉強の様子（小学生・中学生・高校生 2015年）



注1) 「あてはまる」 + 「まああてはまる」の比率。

注2) 携帯電話やスマートフォンに関する項目は中・高校生のみたずねている。

図2-6-6 勉強のときの携帯電話やスマートフォンの扱い方や影響
(中学生・高校生、成績自己評価別・学校偏差値帯別、2015年)



注) 「あてはまる」 + 「まああてはまる」の比率。

7

テスト勉強の開始時期

1990年からの25年間で、中・高校生ともテスト勉強の開始時期が早まっている。とくに中学生は1990年に比べ、「2週間くらい前から」の回答が25.2ポイントも増加している(1990年18.9%、2015年44.1%)。さらに中学生では成績による差は縮まっていないのに対して、高校生では全体的には学校偏差値帯による差が縮まっている。

中・高校生に対して、テスト(定期考査)勉強開始時期についてたずねている。その結果を経年比較でみてみよう。

● 「2週間くらい前から」テスト勉強を始める中学生が大幅に増加

図2-7-1は中学生の結果を示している。「2週間くらい前から」の回答をみると、1990年では2割弱だったが、2006年では3割5分になり、2015年では4割強となる。1990年からの25年間で増え続けているのが大きな特徴といえる。1990年では、「1週間くらい前から」テスト勉強を始めた中学生が3割だったが、その割合が減り続けて、2015年では2割となる。中学生がより早くからテスト勉強を始めるようになったことがわかる。第4章の学力観や成績観の結果と合わせて考えると、テストを意識し、よりよい成績をとりたいと考える真面目な中学生の姿がうかがえる。

それでは、どういう中学生がテスト勉強の

開始時期を早めたのか。ここで2006年と2015年の成績自己評価別の特徴をみてみよう(図2-7-2)。

特徴をまとめると、以下の通りである。1つ目は2015年は2006年と同様に、成績上位ほどより早い時期からテスト勉強を始めていること。2つ目は2015年では、どの成績層でも2006年に比べ、「2週間くらい前から」始める比率が上昇していること。具体的には「2週間くらい前から」の比率をみると、成績上位では45.2%(2006年)→54.0%(2015年)、成績中位では37.9%→47.6%、成績下位では27.7%→33.3%である。3つ目は「2週間くらい前から」の上昇幅は成績下位が成績上位・中位に比べ、小さいこと(成績上位8.8ポイント、成績中位9.7ポイント、成績下位5.6ポイント)。どの成績層もテスト勉強の開始時期が早まっているが、成績上位と下位との差は3.2ポイントと、若干広がっている。



テスト（定期考査）前には、あなたはいつ頃からテスト勉強を始めますか。

図2-7-1 テスト勉強の開始時期（中学生、経年比較）

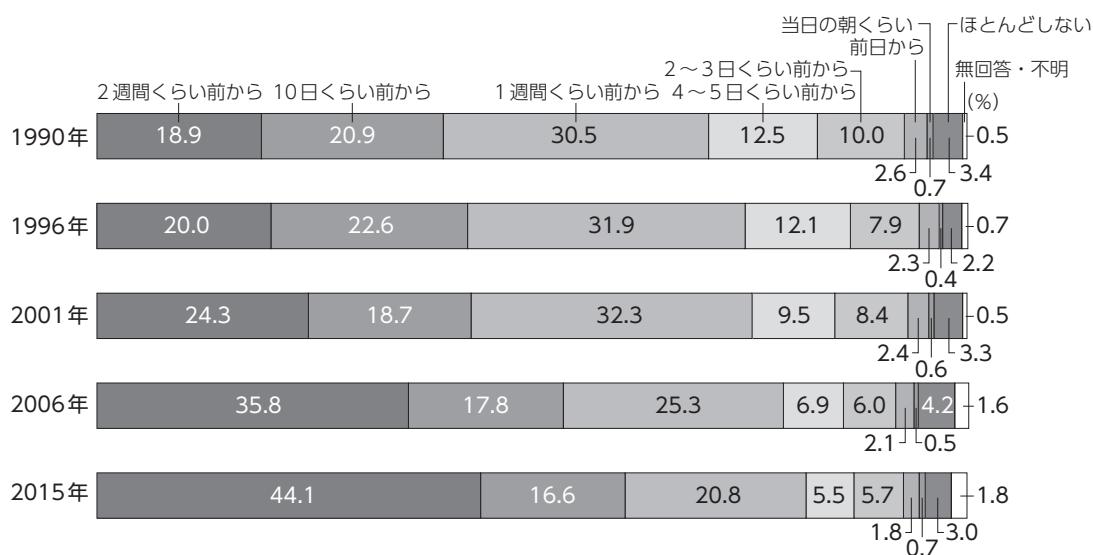
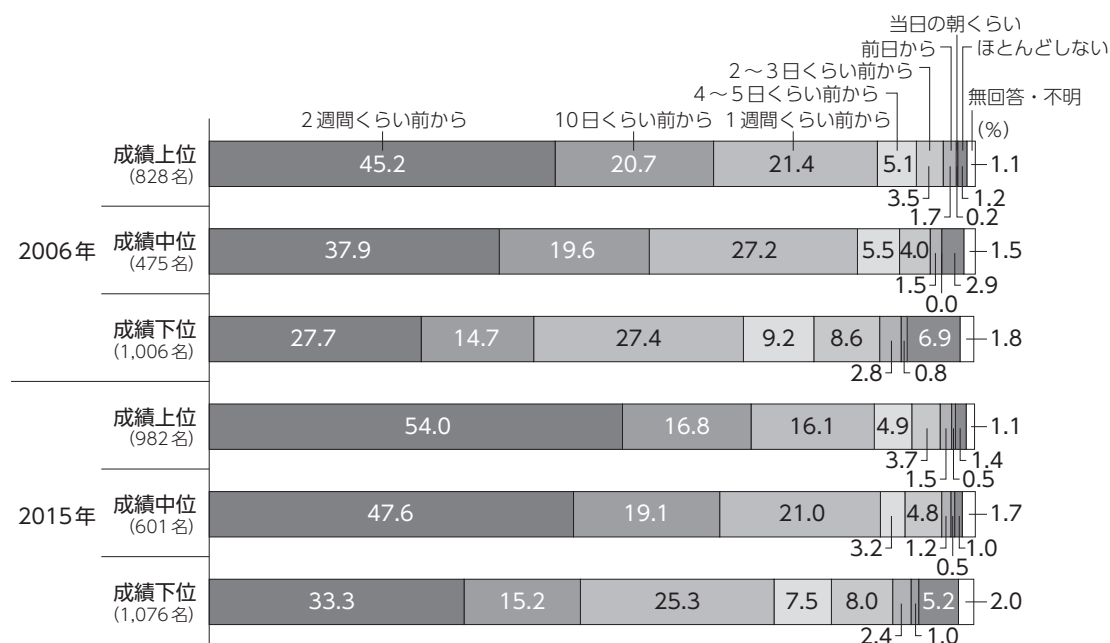


図2-7-2 テスト勉強の開始時期（中学生、成績自己評価別、経年比較）



●2006年に比べ、高校生は学校偏差値帯による差が縮まっている

次に、高校生の結果をみてみたい。図2-7-3でテスト勉強の開始時期の経年変化をみると、1990年から2015年調査まで変わらず、3人に1人が「1週間くらい前から」テスト勉強を始めている。「2週間くらい前から」は2015年では23.7%と、2006年の16.3%から増加している。「2週間くらい前から」+「10日くらい前から」+「1週間くらい前から」の値をみると、2001年63.8%→2006年69.5%→2015年76.2%と増加し続けている。中学生ほど大きな変化ではないが、全体的には高校生もテスト勉強の開始時期が早まっているといえる。

学校偏差値帯による違いはあるのだろうか。図2-7-4は学校偏差値帯による2006年と2015年の経年変化を示している。

「2週間くらい前から」+「10日くらい前から」+「1週間くらい前から」（以下同）をみると、55以上は79.9%(2006年)→81.5%(2015年)、50以上55未満は71.9%→78.9%、45以上50未満は75.2%→71.5%、45未満は56.0%→68.5%である。55以上は2006年も2015年も他の偏差値帯に比べ、早い時期からテスト勉強を始める比率がもっとも高い。また2006年に比べ、45以上50未満以外のどの学校偏差値帯でもテスト勉強の開始時期が早まっている。増加幅をみると、45未満はもっとも大きく12.5ポイントで、50以上55未満はそれに次ぎ7.0ポイントである。45未満の増加幅が大きいいため、55以上との差が縮まった（両者の差：2006年23.9ポイント>2015年13.0ポイント）。

年	2週間くらい前から	10日くらい前から	1週間くらい前から	4～5日くらい前から	2～3日くらい前から	当日の朝くらい前日から	ほとんどしない
1990年	10.2	17.1	32.3	16.4	14.0	5.9	1.8
1996年	8.6	15.8	31.0	16.1	16.7	7.9	0.2
2001年	11.9	16.4	35.5	14.1	12.9	5.7	0.4
2006年	16.3	16.8	36.4	9.3	12.5	4.5	0.5
2015年	23.7	17.1	35.4	6.8	9.6	4.1	0.6

2006年

年齢層	2週間くらい前から	10日くらい前から	1週間くらい前から	4～5日くらい前から	2～3日くらい前から	前日から	当日の朝くらい	ほとんどしない	無回答・不明 (%)
55以上	21.0	21.5	37.4	7.0	8.4	2.1	0.7	1.6	0.4
50以上55未満	19.6	14.4	37.9	8.3	11.6	4.3	0.7	2.7	0.7
45以上50未満	17.8	18.0	39.4	7.5	10.3	5.3	0.5	1.0	0.2
45未満	9.2	13.1	33.7	12.8	17.7	7.0	2.0	3.9	0.5

2015年

年齢層	2週間くらい前から	10日くらい前から	1週間くらい前から	4～5日くらい前から	2～3日くらい前から	前日から	当日の朝くらい	ほとんどしない	無回答・不明 (%)
55以上	28.3	20.1	33.1	5.9	6.6	3.6	0.5	1.2	0.7
50以上55未満	25.9	19.6	33.4	6.1	8.4	3.1	1.0	2.2	0.4
45以上50未満	20.6	13.4	37.5	7.7	11.5	4.6	1.0	3.0	0.8
45未満	16.3	12.7	39.5	8.3	14.0	5.5	1.1	2.0	0.6

8

日常生活の中の学び

1990年に比べ、とくに小・中学生は「歴史小説」を読むといった読書行動など多くの項目で、「する」（「よくする」＋「時々する」、以下同）と回答した比率が増えている。全般的には小・中・高校生は日常生活では意欲的に学ぶようになった。また、「新聞のニュース欄を読む」中・高校生は大幅に減少している。一方、2015年の新規項目である「インターネットのニュースを読む」では半数以上の中・高校生が「する」と回答している。小学生では、多くの項目で保護者の学歴による差が広がっており、日常生活での学びは家庭環境による影響が大きいといえる。

●歴史や文学作品などの本を読む小・中・高校生が増えている

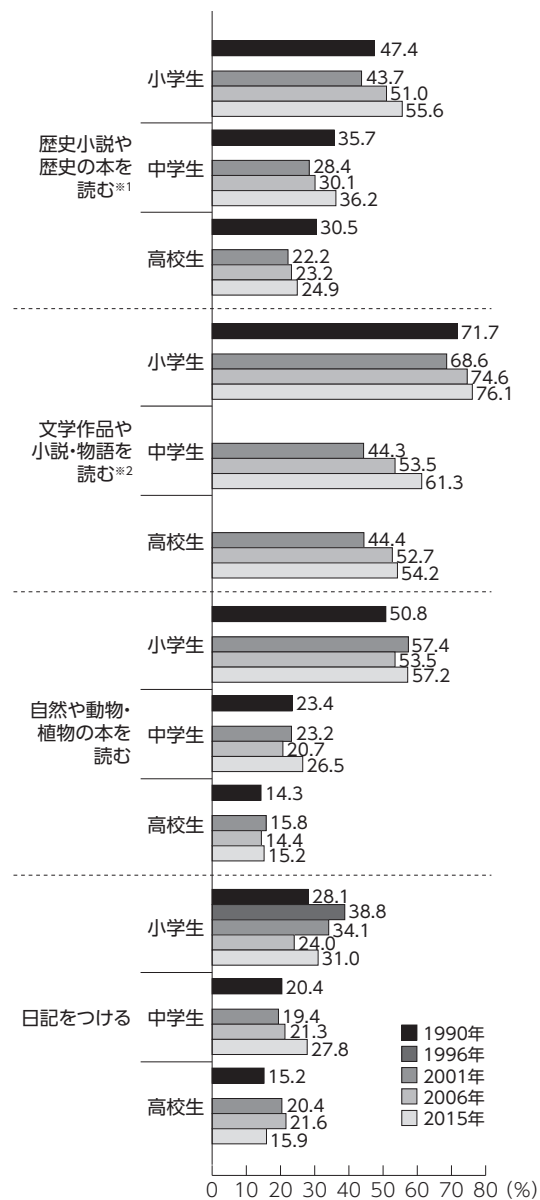
本節では、広い意味で、日常生活の中の学びについて、この25年間で小・中・高校生の変化を検討していきたい。経年による変化を図2-8-1、図2-8-2に示した。1996年調査では、中・高校生にはこの質問をしておらず、小学生は一部の項目のみたずねているため、1990年との比較を中心に、経年推移をみてみたい。

読書に関する項目をみると（図2-8-1）、「歴史小説や歴史の本を読む」（「よくする」＋「時々する」、以下同）では、2006年に比べ、中学生は6.1ポイント増加し、小学生・高校生より伸び幅が大きい。一方1990年に比べ、小学生が8.2ポイント増加し、中学生が横ばいであるのに対し、高校生は5.6ポイント減少している。「文学作品や小説・物語を読む」は、2001年に比べ、どの学校段階も5ポイント以上増加している。とくに中学生はもっとも増加幅が大きい（17ポイント増加）。「自然や動物・植物の本を読む」は調査年によって、数値が若干上がった、下がったりしているが、1990年に比べ、

小学生は6.4ポイント増加した。読書の3項目の特徴をまとめると、一つには読書の比率は小学生＞中学生＞高校生の順であること、二つには小・中学生ではどのジャンルの本も読むようになったということがあげられる。小・中学生の読書の比率の上昇は学校での朝読書などの影響があったかもしれない。

「日記をつける」については、小学生は1996年時点では38.8%ともっとも高い数値を記録したが、その後2006年まで減少し続けた。2015年では2006年に比べ、7.0ポイント増加し、3割台に回復した。中学生は1990年、2001年、2006年は横ばいだったが、2015年では27.8%と、この質問をたずねた4時点のうち、もっとも高い数値となった。高校生は2015年では15.9%で、1990年に比べると、横ばいであるが、2006年よりも5.7ポイント減少した。このように2015年の調査結果からは、3人に1人ぐらいの小・中学生は日記をつけていることがわかる。学校現場の話を聞くと、子どもたちに毎日一行日記を書かせ、先生がコメントを書いて子どもに返すという指導を行っている学校もあるようだ。

図2-8-1 日常生活での学び1（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注1) 「よくする」＋「時々する」の比率。

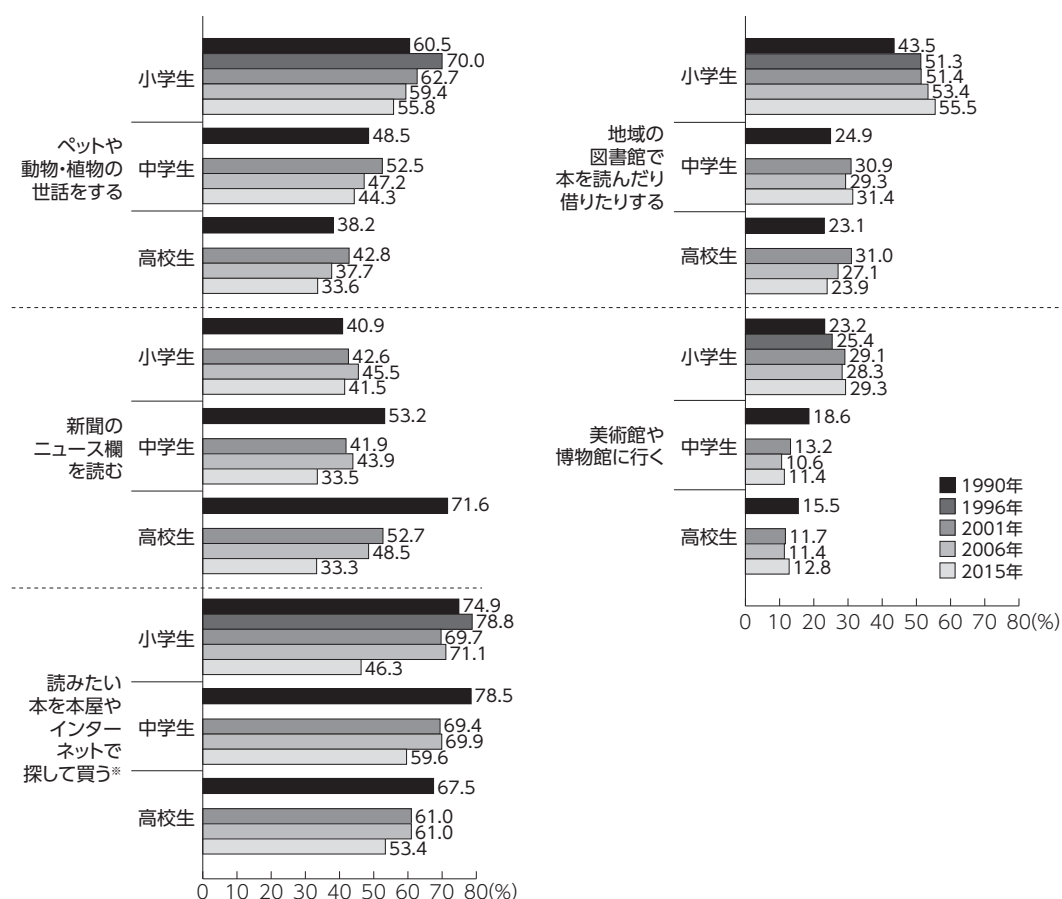
注2) ※1は小学生には「歴史の本や伝記の本を読む」とたずねている。※2は小学生には「文学・小説・物語・童話などの本を読む」とたずねている。

●「新聞のニュース欄を読む」中・高校生が大幅に減少している

次に、図2-8-2をみてみよう。「家でペットや動物・植物の世話をする」は小学生では1996年に、中・高校生では2001年に、一旦上がったものの、その後、下がっており、また1990年に比べ、家で動植物の世話をする小・中・高校生はいずれも4ポイント程度減少した（小55.8%、中44.3%、高33.6%）。

「新聞のニュース欄を読む」については、小学生では質問をした4時点のうち、2006年では45.5%で、比率が少し高めだったが、2015年では41.5%と若干減少した。一方、中・高校生について、対2001年では、中学生は8.4ポイント、高校生は19.4ポイント減少した。対1990年では、中学生は53.2%→33.5%で19.7ポイント減、高校生は71.6%→33.3%で38.3ポイント減少した。

図2-8-2 日常生活での学び2（小学生・中学生・高校生、経年比較）



注1)「よくする」+「時々する」の比率。

注2)※は1990年～2006年は「読みたい本を本屋で探して買う」とたずねている。

この25年間で、「新聞のニュース欄を読む」中・高校生が大幅に減少した理由は何だろう。パソコンやスマートフォン、タブレットの普及を受けて、2015年調査では、中・高校生については、新たに「インターネットのニュースを読む」を追加した。この結果、5割の中学生、6割5分の高校生はインターネットでニュースを読んでいることがわかった（図2-8-3）。ニュースを読むという行動は新聞からインターネットに移行していると推測できる。

「読みたい本を本屋やインターネットで探して買う」という項目は、2006年までは「インターネットで」の文言がなく、「読みたい本を本屋で探して買う」だったため、数値の比較は難しい。対1990年では、「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」比率の上昇（高校生を除く）をあわせて考えると、本を購入する行動が減少し、図書館で本を読んだり借りたりする行動に移行している可能性があるかもしれない（図2-8-2）。

「美術館や博物館に行く」をみると、対

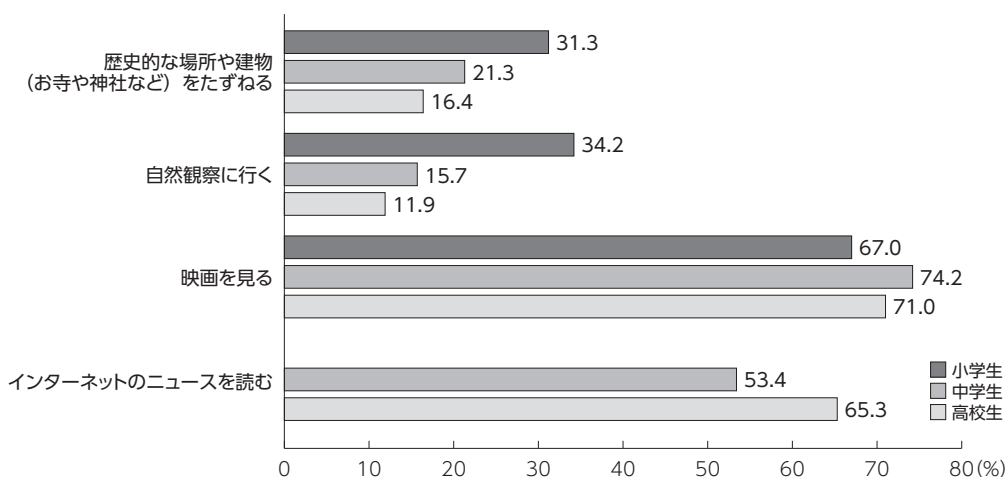
1990年では、小学生は上昇傾向で、2015年では29.3%となる。中学生は7.2ポイントさがり11.4%、高校生は2.7ポイントさがり、12.8%だ（図2-8-2）。

●日常生活で「映画を見る」小・中・高校生は7割前後

2015年調査で、新たに追加した項目の結果は図2-8-3にまとめた。31.3%の小学生、21.3%の中学生、16.4%の高校生が「歴史的な場所や建物（お寺や神社など）をたずねる」と回答している。「自然観察に行く」は34.2%の小学生、15.7%の中学生、11.9%の高校生が行っている。この2項目とも、小学生が「する」（「よくする」＋「時々する」、以下同）と回答した比率が高く、中学生、高校生と続く。

「映画を見る」小・中・高校生は7割前後である。中・高校生にとっては、日常生活でよく行っている活動といえる。「インターネットのニュースを読む」は上述した通り、半数以上の中・高校生が「する」と回答した。

図2-8-3 日常生活での学び（小学生・中学生・高校生、2015年）



注1) 「よくする」＋「時々する」の比率。

注2) 「インターネットのニュースを読む」は小学生にはたずねていない。

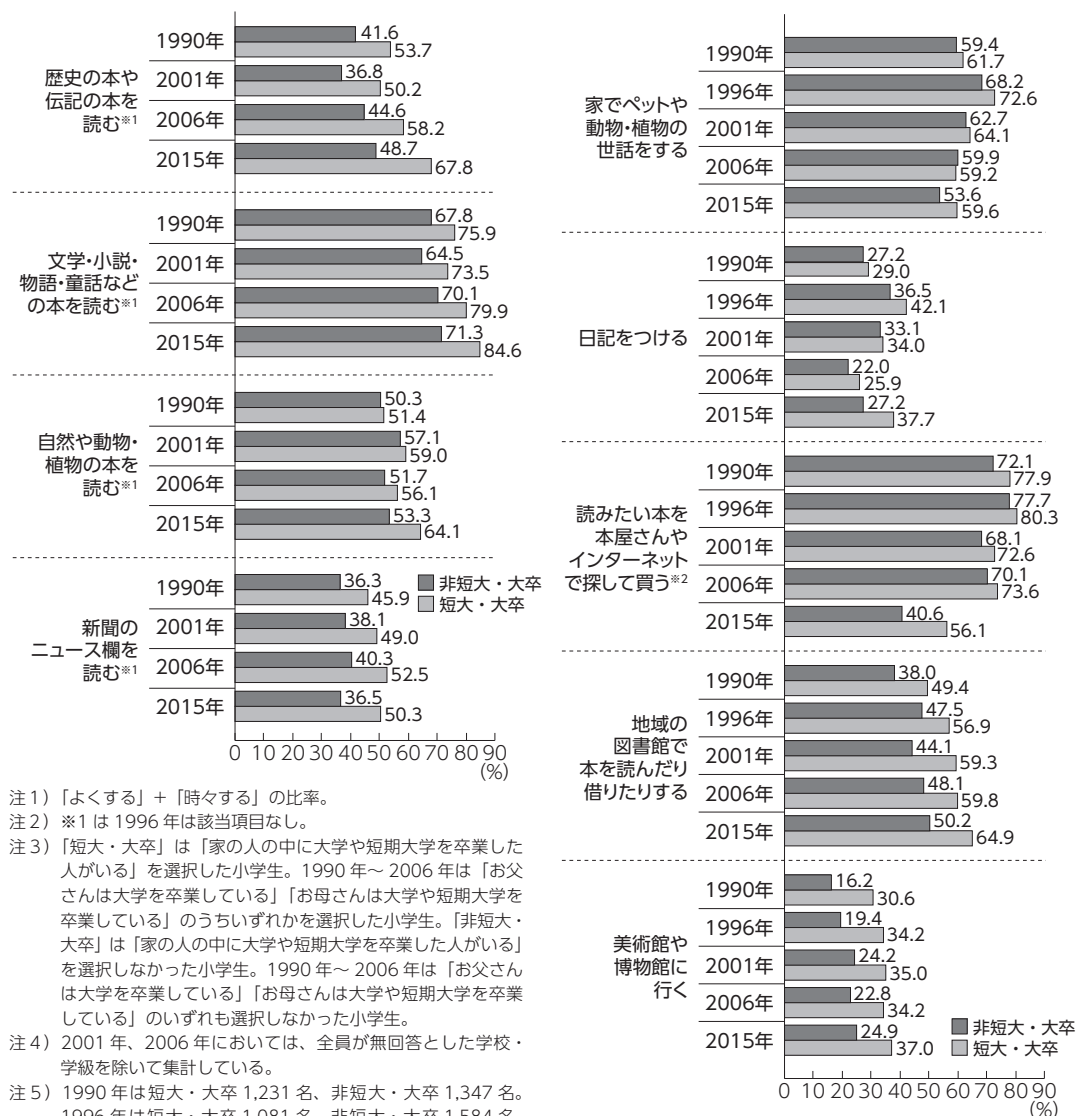
●小学生では1990年に比べ、保護者の学歴による差が広がっている

ここまでみてきた通り、日常生活でも小・中・高校生は意欲的に学ぶようになったといえる。それでは、すべての子どもにこのような傾向がみられたのだろうか。家庭環境による差があるのだろうか。ここで小学生のデータを取り上げ、保護者の学歴（2015年では「家の人」というたずね方であるが、ここでは、

「保護者」という表現とする）による差があるかについて考察していきたい（図2-8-4）。

まず保護者の学歴をたずねた項目を確認する。1990年から2006年までは、「お父さんは大学を卒業している」「お母さんは大学や短期大学を卒業している」と、父親と母親の学歴を別々にたずねていた。2015年では、「家の人の中に大学や短期大学を卒業した人

図2-8-4 日常生活での学び（小学生、保護者の学歴別、経年比較）



注1) 「よくする」 + 「時々する」の比率。

注2) ※1は1996年は該当項目なし。

注3) 「短大・大卒」は「家の人の中に大学や短期大学を卒業した人がある」を選択した小学生。1990年～2006年は「お父さんは大学を卒業している」「お母さんは大学や短期大学を卒業している」のうちいずれかを選択した小学生。「非短大・大卒」は「家の人の中に大学や短期大学を卒業した人がある」を選択しなかった小学生。1990年～2006年は「お父さんは大学を卒業している」「お母さんは大学や短期大学を卒業している」のいずれも選択しなかった小学生。

注4) 2001年、2006年においては、全員が無回答とした学校・学級を除いて集計している。

注5) 1990年は短大・大卒1,231名、非短大・大卒1,347名。1996年は短大・大卒1,081名、非短大・大卒1,584名。2001年は短大・大卒935名、非短大・大卒1,216名。2006年は短大・大卒1,257名、非短大・大卒1,384名。2015年は短大・大卒942名、非短大・大卒1,659名。

注6) ※2は1990年～2006年では「読みたい本を本屋さんで探して買う」とたずねている。

がいる」というたずね方に変えている。2015年のたずね方に近づけるため、1990年から2006年までの父親の学歴と母親の学歴に関する回答を合算した。それでもたずね方が異なるため、正確に比較することが難しく、傾向としてみなければと考えている。

図2-8-4をみると、以下の3つの特徴がある。1つ目は、全般的に「短大・大卒」の家庭が「非短大・大卒」の家庭より、「する」（「よくする」＋「時々する」、以下同）と回答した比率が高いこと。

2つ目は、この25年間で、「短大・大卒」の家庭も「非短大・大卒」の家庭も、「する」の回答比率が減っているのは「家でペットや動物・植物の世話をする」「読みたい本を本屋さんやインターネットで探して買う」の2項目のみだった。ほかの項目については「短大・大卒」の家庭では回答比率が増加したのに対して、「非短大・大卒」の家庭ではそうではなかった。「非短大・大卒」の家庭では、「新聞のニュース欄を読む」と「日記をつける」の回答比率が横ばい。また、「新聞のニュース欄を読む」では、対1990年で数値の変化はあまりなかった（図2-8-2）。しかし、保護者の学歴別でみると、1990年に比べ、「短大・大卒」の家庭は45.9%→50.3%と4.4ポイント増に対して、「非短大・大卒」の家庭は36.3%→36.5%と横ばいだった。同様に、「日記をつける」では、対1990年で数

値は微増だった（図2-8-1）。しかし、保護者の学歴別でみると、1990年に比べ、「短大・大卒」の家庭は29.0%→37.7%と8.7ポイント増に対して、「非短大・大卒」の家庭はまったく変化がなく、27.2%だった。

3つ目は、「短大・大卒」の家庭と「非短大・大卒」の家庭とでは、1990年に比べ、9項目のうち5項目で差が5ポイント以上広がっている。差の大きい順から並べると、「自然や動物・植物の本を読む」（9.7ポイント増）、「読みたい本を本屋さんやインターネットで探して買う」（9.7ポイント増）、「日記をつける」（8.7ポイント増）、「歴史の本や伝記の本を読む」（7.0ポイント増）、「文学・小説・物語・童話などの本を読む」（5.2ポイント増）である。残りの4項目のうち、「美術館や博物館に行く」だけは1990年に比べ、保護者の学歴による差が2.3ポイントとわずかに縮まった。あとの3項目では3～4ポイントと若干差が広がっていることがわかる。

小学生については、全体的には日常生活の中で意欲的に本を読んだり、日記をつけたり、新聞を読んだりするようになったといえる一方、保護者の学歴による差が広がる傾向もみられた。日常生活での学びは家庭環境による影響が大きいといえる。

なお、中・高校生では保護者の学歴による差が広がる傾向はみられなかった。

9

ICTメディアを使った学習

5割5分の小学生、約5割の中学生、6割の高校生はパソコンやスマートフォン、タブレットなどを使って勉強することが「ある」（「よくある」＋「時々ある」、以下同）と回答している。さらにICTメディアを使用して勉強する中・高校生に対して、勉強内容についてたずねたところ、「辞書」「情報収集」「友だちにわからないところを質問する」という回答が多かった。また8割の中学生、6割の高校生はICTメディアを使った勉強が「楽しい」、「勉強の効率が上がる」と感じている。ICTメディアを使った勉強の経験率や勉強内容では、性別、成績自己評価・学校偏差値帯による差もみられた。

●約5割～6割の小・中・高校生はICTメディアを使って勉強

近年、スマートフォン、タブレットといったICTメディアの普及が急速に進んでいる。このようなICT環境の変化は子どもの学習にどのような影響を与えているのだろうか。その影響を明らかにするため、2015年調査では、ICTメディアを利用した学習に関する調査項目を追加した。

まず、小・中・高校生に「パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使って勉強することがありますか」とたずねた結果についてみてみたい（図2-9-1）。

小学生の55.5%、中学生の49.9%、高校生の60.5%がICTメディアを使って勉強することが「ある」（「よくある」＋「時々ある」、以下同）と回答している。

●性別や成績の自己評価・学校偏差値帯により利用率が異なる

性別でみると、小・中・高校生とも男子より女子の方が「ある」と回答した比率が高い傾向がみられた。また、性別による差は小学生では4.0ポイントととっても小さく、中学生は19.9ポイントととっても大きいことがわかる（図2-9-2）。

また中学生では成績上位、成績中位は成績下位に比べ、「ある」と回答した比率が高い傾向がみられた。高校生では、偏差値55以上、45以上50未満は6割であるのに対して、50以上55未満、45未満は5割である。ICTメディアを使って勉強する経験は成績層や学校偏差値帯による差があるといえる（図2-9-3）。

Q

あなたは、パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使って勉強することがありますか（学校の授業での利用は含めません）。

図2-9-1 ICTメディアの学習利用の有無（小学生・中学生・高校生、2015年）

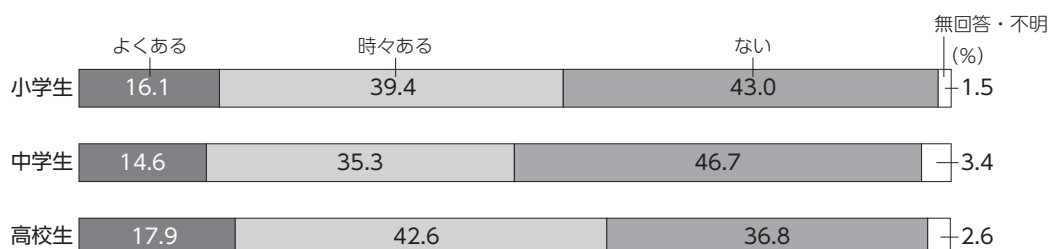


図2-9-2 ICTメディアの学習利用の有無（小学生・中学生・高校生、性別、2015年）

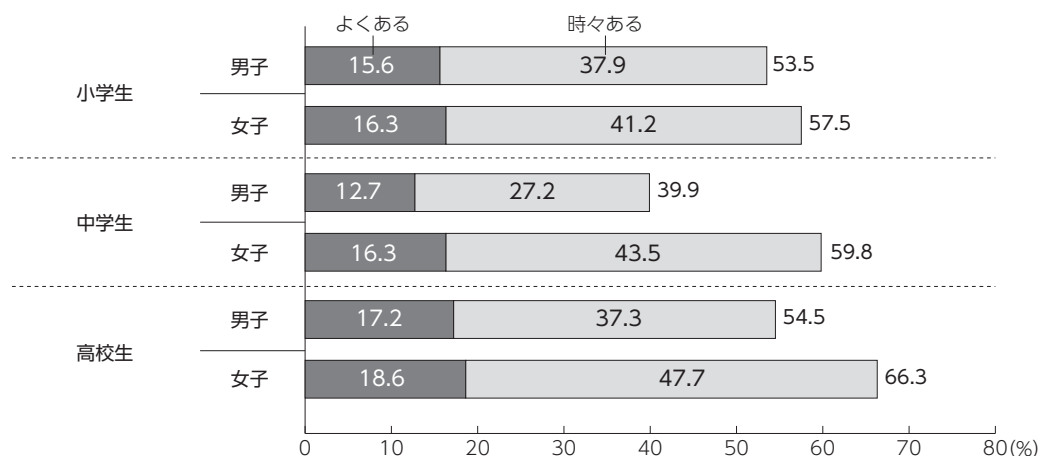
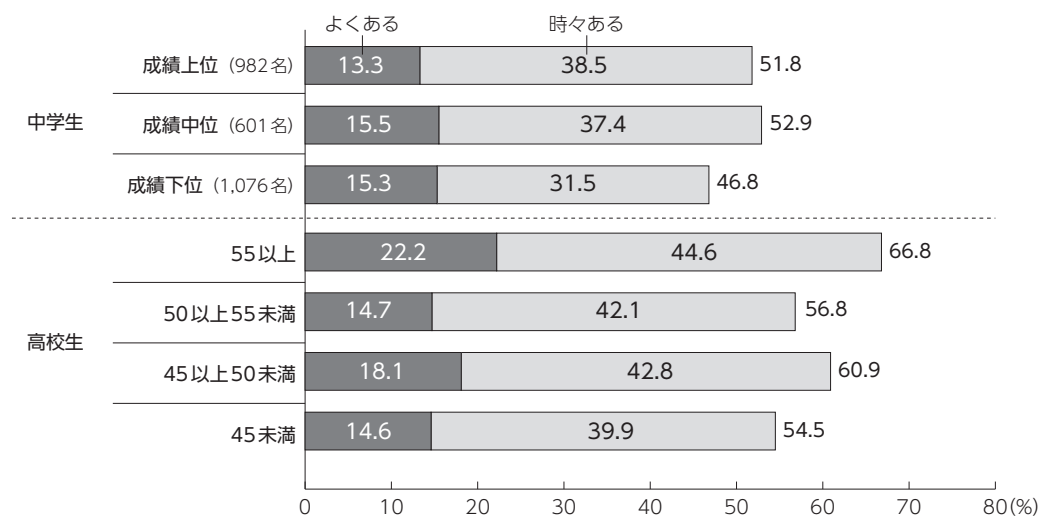


図2-9-3 ICTメディアの学習利用の有無
（中学生・高校生、成績自己評価別・学校偏差値帯別、2015年）



●高校生の女子はICTメディアを勉強時のコミュニケーションツールとして利用

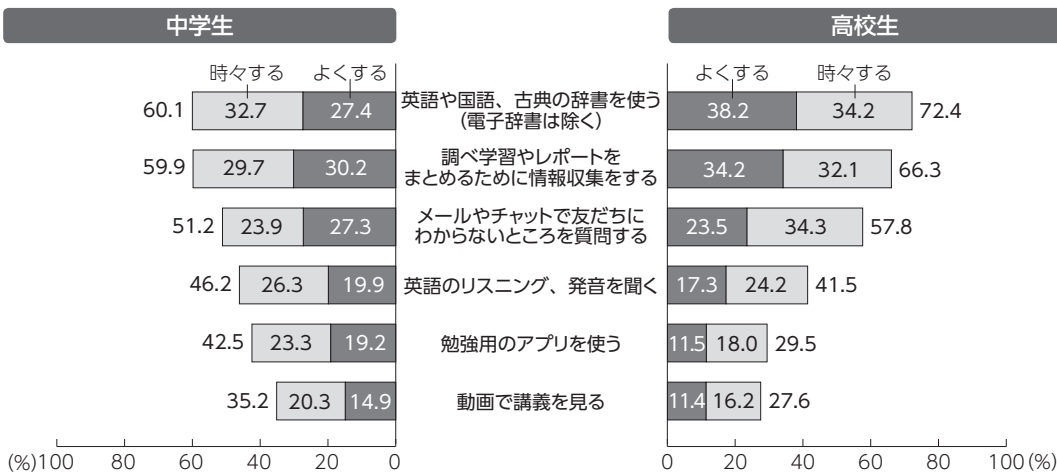
次に、ICTメディアを使って勉強することが「よくある」または「時々ある」と回答した中・高校生に対して、勉強の内容についてたずねた（図2-9-4）。「よくする」+「時々する」の比率をみると、中・高校生とも「英語や国語、古典の辞書を使う（電子辞書を除く）」（中学生60.1%、高校生72.4%）、「調べ学習やレポートをまとめるために情報収集をする」（中学生59.9%、高校生66.3%）、「メールやチャットで友だちにわからないところを質問する」（中学生51.2%、高校生57.8%）は高く、かつ高校生の方が利用が多い傾向がみられた。一方、「英語のリスニング、発音を聞く」（中学生46.2%、高校生41.5%）、「勉強用のアプリを使う」（中学生42.5%、高校生29.5%）、「動画で講義を見る」（中学生35.2%、高校生27.6%）では高校生の方が利用率が低い。

性別でみると、中・高校生とも、女子のほうがICTメディアを利用して勉強する比率が高い（表2-9-1）。もう少し詳しくみると、中学生では、多くの項目で女子は男子より5ポイント以上利用率が高い。とくに「英語や国語、古典の辞書を使う」は9.9ポイント、「英語のリスニング、発音を聞く」は13.1ポイント差があり、中学生の女子は英語学習にICTメディアをよく利用していることがわかる。高校生になると、ほとんどの項目で性別による差が中学生の時より小さくなる。しかし、「メールやチャットで友だちにわからないところを質問する」だけは、中学生では、男子（47.4%）＜女子（53.6%）と6.2ポイント差だが、高校生では、男子（51.9%）＜女子（62.7%）と10.8ポイント差となり、性差が広がっている。高校生の女子はICTメディアを勉強時のコミュニケーションツールとして利用していることが大きな特徴といえる。

Q

「よくある」あるいは「時々ある」と答えた方にうかがいます
あなたは、パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使って次のようなことをしますか。

図2-9-4 ICTメディアの学習利用の内容（中学生・高校生 [利用者のみ]、2015年）



注1) 「パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使って勉強することがありますか（学校の授業での利用は含めません）」に対して、「よくある」「時々ある」と回答した中・高校生のみにとずねている。

注2) 回答数は中学生 1,347 名、高校生 2,681 名。

●高校生では、ICTメディアを使って勉強する内容は学校偏差値帯による差がある

さらに、高校生を取り上げ、学校偏差値帯による差をみてみよう（図2-9-5）。「英語や国語、古典の辞書を使う（電子辞書は除く）」「メールやチャットで友だちにわからないところを質問する」は学校偏差値帯が低いほど利用率が高く、それ以外の項目ではおおむね学校偏差値が高いほど利用率が高い傾向であった。中学生については紙面の都合でグラフは割愛するが、成績上位ほど使用比率が

高いのは「英語のリスニング、発音を聞く」で、一方、成績下位ほど使用比率が高いのは「メールやチャットで友だちにわからないところを質問する」であった。ほとんどの項目で学校偏差値帯による差が出ている高校生に比べ、中学生では多くの項目では成績の自己評価による利用率の差がなかった。ただし、中・高校生に共通しているのは成績や学校偏差値帯が低い生徒ほどICTメディアを勉強時のコミュニケーションツールとして利用しているということである。

表2-9-1 ICTメディアの学習利用の内容
(中学生・高校生 [利用者のみ]、性別、2015年)

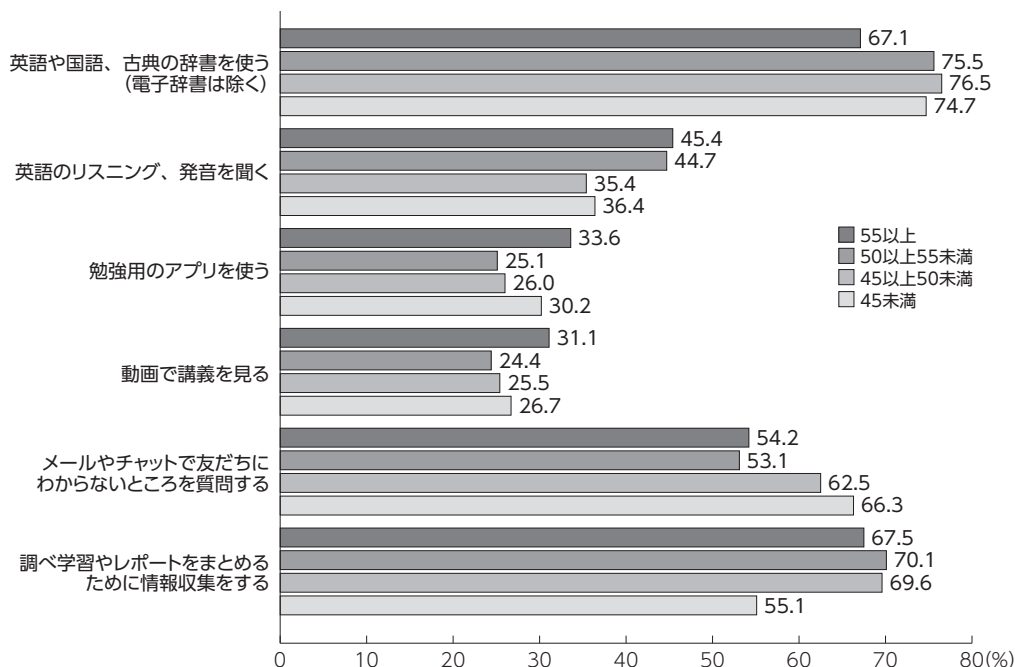
(%)

	中学生			高校生		
	男子		女子	男子		女子
調べ学習やレポートをまとめるために情報収集をする	56.0	<	62.5	63.2	<	68.8
英語や国語、古典の辞書を使う（電子辞書は除く）	54.1	<	64.0	70.1		74.0
メールやチャットで友だちにわからないところを質問する	47.4	<	53.6	51.9	<	62.7
勉強用のアプリを使う	41.8		43.1	28.1		30.3
英語のリスニング、発音を聞く	38.4	<	51.5	39.5		43.0
動画で講義を見る	37.6		33.6	27.5		27.6

注1) 「よくする」+「時々する」の比率。 注2) <> は性別の差が5.0ポイント以上のものを示す。

注3) 「パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使って勉強することがありますか（学校の授業での利用は含めません）」に対して、「よくある」「時々ある」と回答した中・高校生のみになぞっている。

図2-9-5 ICTメディアの学習利用の内容
(高校生 [利用者のみ]、学校偏差値帯別、2015年)



注1) 「よくする」+「時々する」の比率。

注2) 回答数は偏差値 55 以上 1,015 名、50 以上 55 未満 618 名、45 以上 50 未満 562 名、45 未満 486 名。

●多くの中・高校生はICTメディアを使った勉強は「楽しい」、「勉強の効率があがる」と感じている

上述したように、ほぼ5割以上の小・中・高校生がパソコンやスマートフォン、タブレットを使って勉強した経験がある。また経験者のうち、多くの中・高校生は英語学習や講義視聴、情報収集、勉強時のコミュニケーションツールとしてICTメディアを利用することがわかる。それでは、ICTメディアを使った勉強についてはどのように感じているのだろうか。「楽しい」と思うのか、「勉強の効率があがる」と思うのかの2項目についてたずねてみた。

図2-9-6に示した通り、中学生は高校生よりICTメディアを使った勉強が「楽しい」（中学生8割、高校生6割、「とてもそう思う」+「まあそう思う」、以下同）と感じている。また7割の中・高校生が「勉強の効率があがる」と感じている。高校生については、学校偏差値帯が低いほど、ICTメディアを使った勉強が「楽しい」、「勉強の効率があがる」と感じている（図2-9-7）。学校偏差値帯が低い高校生にとっては、ICTメディアは勉強を促進するツールであるかもしれない。なお、中学生では成績の自己評価による差はみられなかった。

図2-9-6 パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使った勉強について感じていること（中学生・高校生【利用者のみ】、2015年）

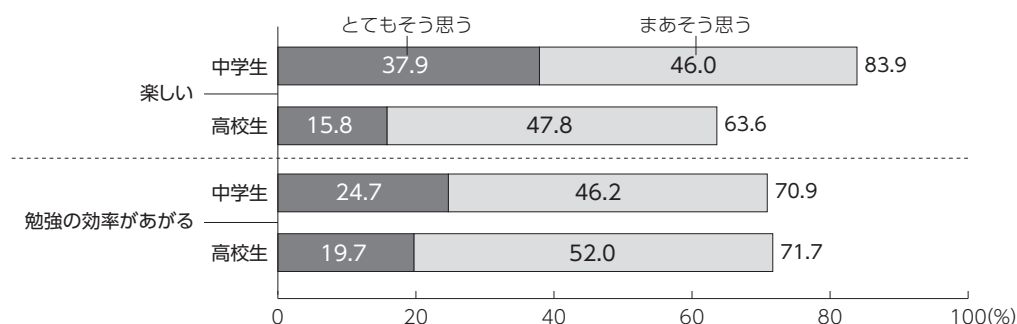
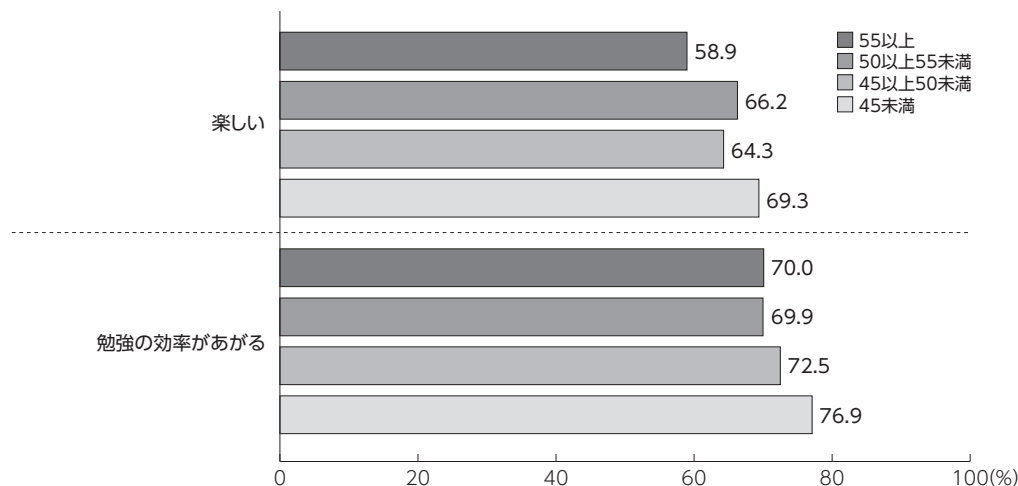


図2-9-7 パソコンやスマートフォン、タブレットなどを使った勉強について感じていること（高校生【利用者のみ】、学校偏差値帯別、2015年）



注）「とてもそう思う」+「まあそう思う」の比率。